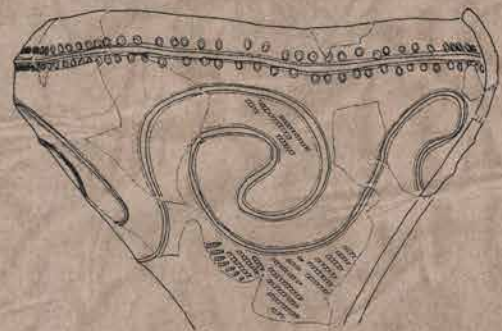


崎山遺跡群 VIII

—平成5年度発掘調査概報—



1994.3

岩手県宮古市教育委員会

崎山遺跡群Ⅷ

—平成5年度発掘調査概報—



崎山貝塚垂直写真

1994.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education
Miyako, Iwate, Japan

カラー1 崎山貝塚第9次調査区全景



カラー 1

カラー2 石棒1検出状況

カラー3 P35出土土器



カラー 2



カラー 3

序 文

昭和61年度から国庫補助、県費補助を受けて実施してまいりました崎山遺跡群発掘調査事業も今年度をもちまして一応の区切りをつけることとなりました。

8ヶ年にわたる調査年度の中で、5遺跡にて合計18件の調査を実施してまいりましたが、この中でも特に崎山貝塚につきましては、文化庁および岩手県教育委員会の御指導により継続的に範囲確認調査を実施してきたところであります。

今年度までの範囲確認調査の結果、崎山貝塚は他にあまり例を見ない極めて特徴的な集落跡と豊富な動物遺存体や骨角器を含む貝塚がセットで、しかも良好な状態で保存されている貴重な遺跡であることが判明してまいりました。

このため宮古市としましても、この重要な崎山貝塚を保存し、史跡公園等として活用したいという意志決定をいたしました。

今後は、地権者の皆様をはじめとする市民各位の御協力をいただきながら、早期実現に向けて全力をあげて努力する所存でございます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり様々な御指導をいただきました文化庁記念物課、岩手県教育委員会文化課、岩手県立博物館、岩手県埋蔵文化財センター、陸前高田市立博物館をはじめとする関係機関と、御理解、御協力下さった地権者各位ならびに関係者の皆様方に厚く御礼申し上げて序文といたします。

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

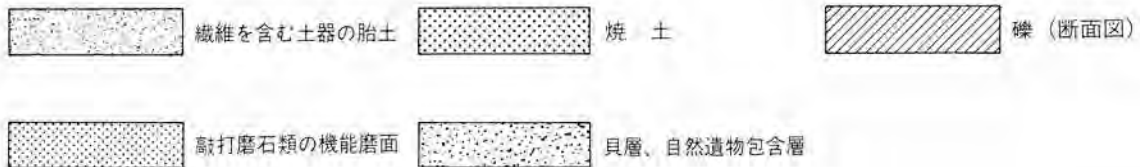
例 言

1. 本書は平成5年度に国庫補助を受けて実施した崎山遺跡群早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査・崎山貝塚第9次調査の概報である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）で、発掘調査および本書の執筆、編集は高橋が担当し、鎌田・阿部がこれを補佐した。
3. 調査座標は平面直角座標第X系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにRを冠して表示した。

座標軸方向 第X系に準じる

調査座標原点 X -35,800,000、 Y +97,000.000

4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 遺構・遺物の表現については下記のとおりとした。



6. 発掘調査および遺物の整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。(敬称略)

岡村 道雄 (文化庁記念物課)	名久井文明 (岩手県立宮古高等学校定時制教頭 宮古市文化財保護審議委員)
相原 康二 (岩手県教育委員会文化課)	佐藤 二郎 (長内水源工業K. K.)
小田野哲憲 (岩手県教育委員会文化課)	佐藤 正彦 (陸前高田市立博物館)
熊谷 常正 (岩手県教育委員会文化課)	熊谷 賢 (岩手考古学会員)
中村 英俊 (岩手県教育委員会文化課)	

7. 本文中の引用文献は次のとおりとした。(いずれも宮古市教育委員会刊行)

1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲 → 『大付報告79』
熊谷 常正

1983～86 『宮古市分布調査報告書1～4』 武田将男 → 『分布調査1～4』

1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 → 『分布図86』

1987～1993 『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅶ 昭和61年度～平成4年度発掘調査概報』
→ 『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅶ』

1987 『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡発掘調査報告書』 上野猛 → 『崎山報文87』

1989 『トロノ木Ⅰ遺跡第1次～第7次発掘調査報告書』 → 『トロノ木Ⅰ報文89』

1992 『早稲栃Ⅱ遺跡-第1次・第2次発掘調査報告書-』 → 『早稲栃Ⅱ報文92』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1 調査要旨	1
2 調査体制	3
II 調査内容	3
1 早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査	3
(1) これまでの調査	3
(2) 基本層序	7
(3) 検出された遺構・遺物	7
2 崎山貝塚第9次調査	19
(1) 第1次～第8次調査の概要	19
(2) 調査の目的と方法	19
(3) 台地頂部（東集落）	19
(a) 基本層序	19
(b) 遺構の検出状況	19
(c) 検出された遺構・遺物	23
(4) 低湿地	46
(a) 基本層序	46
(b) 検出された遺物	46
III 調査のまとめ	48

図 版 目 次

- 第1図版 早稲枋Ⅱ遺跡第4次調査区全景・土層堆積状況
- 第2図版 土壇跡堆積状況・礫群検出状況
- 第3図版 調査風景・第Ⅳ層出土土器
- 第4図版 崎山貝塚第9次調査区全景（調査終了時）・崎山貝塚第3次調査区全景（昭和63年度）
- 第5図版 崎山貝塚第9次調査区全景（検出時）・同上（石棒検出位置）
- 第6図版 崎山貝塚調査区全景（検出時）・第1号掘立柱建物跡P33堆積状況
- 第7図版 第1号掘立柱建物跡P14堆積状況・同P49堆積状況・第2号掘立柱建物跡P17堆積状況
- 第8図版 第1号掘立柱建物跡P53堆積状況・P26堆積状況
- 第9図版 P63・P53・P58堆積状況・第4号柱列P25堆積状況
- 第10図版 P55・P56・P57堆積状況・P52・P51堆積状況
- 第11図版 P24堆積状況・P47・P48堆積状況
- 第12図版 石棒1検出状況
- 第13図版 石棒2検出状況・石棒3検出状況
- 第14図版 石棒4検出状況・P35建物出土状況
- 第15図版 P35出土土器・同（1）
- 第16図版 P35出土土器（2）・同（4）
- 第17図版 P35出土土器（3）・第29号堅穴住居跡出土土器（55）
- 第18図版 北側低湿地調査区（調査前）・同（A区）

<カラー口絵>

- カラー1 崎山貝塚第9次調査区全景
- カラー2 石棒1検出状況
- カラー3 P35出土土器

<内表紙写真>

- 崎山貝塚垂直写真

挿 図 目 次

第1図	位置図	2
第2図	崎山遺跡群と周辺の遺跡	4
第3図	早稲枋Ⅱ遺跡検出遺構配置図	5・6
第4図	早稲枋Ⅱ遺跡第4次調査区	8
第5図	早稲枋Ⅱ遺跡出土遺物(1)	10
第6図	早稲枋Ⅱ遺跡出土遺物(2)	11
第7図	早稲枋Ⅱ遺跡出土遺物(3)	12
第8図	崎山貝塚周辺地形図	13・14
第9図	崎山貝塚検出遺構配置図	15・16
第10図	崎山貝塚中央部検出遺構配置図	17・18
第11図	崎山貝塚第9次調査区土層断面図(1)	20
第12図	崎山貝塚第9次調査区検出遺構配置図	21・22
第13図	崎山貝塚第9次調査区検出遺構(1)	25・26
第14図	崎山貝塚第9次調査区検出遺構(2)	27・28
第15図	崎山貝塚第9次調査区土層断面図(2)	31
第16図	崎山貝塚出土遺物(1)	35
第17図	崎山貝塚出土遺物(2)	36
第18図	崎山貝塚出土遺物(3)	37
第19図	崎山貝塚出土遺物(4)	39
第20図	崎山貝塚出土遺物(5)	40
第21図	崎山貝塚出土遺物(6)	41
第22図	崎山貝塚出土遺物(7)	42
第23図	崎山貝塚出土遺物(8)	43
第24図	崎山貝塚出土遺物(9)	45
第25図	崎山貝塚北側低湿地調査区	47

I 調査経過

1 調査要旨

宮古市では国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度より平成2年度までの5ヶ年を第Ⅰ期、平成3年度より平成5年度までの3ヶ年を第Ⅱ期として崎山遺跡群発掘調査事業を実施してきた。

調査事業の最終年度にあたる今年度の発掘調査は、「早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査（個人住宅建築）」と崎山貝塚第9次調査（範囲確認調査）の2件である。総事業費は600万円である。

○早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査 平成5年10月12日～10月21日 90㎡

遺跡の南半部に位置し、土壙跡(?)2基と縄文時代の遺物包含層を検出している。

○崎山貝塚第9次調査 平成5年10月21日～12月27日

台地中央部（東集落）と低湿地にて範囲確認調査を実施した。

<台地中央部（東集落）>

中央広場東縁部～東集落西半部にやや広範囲の調査区を設定した。環壕東半部のプランを確認したほか、東集落西半部にて累しい量の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙跡・柱穴などを検出した。また、石棒の出土量がやや多く、立ったままの状態を検出したものもあり特筆される。

<低湿地>

北側の水田面に調査区を設定したが比較的新しい時期の堆積層が厚く、縄文時代の層準まで達することは出来なかった。このため調査区内にてハンドオーガーによるボーリング調査を試みたところ、縄文時代に伴うと思われる堆積層には達したものの泥炭層等の特殊な包含層は見出せなかった。南側の水田面についても同様である。

○現地説明会等（崎山貝塚範囲確認調査の周知・啓蒙事業）

<現地説明会> 平成5年11月27日

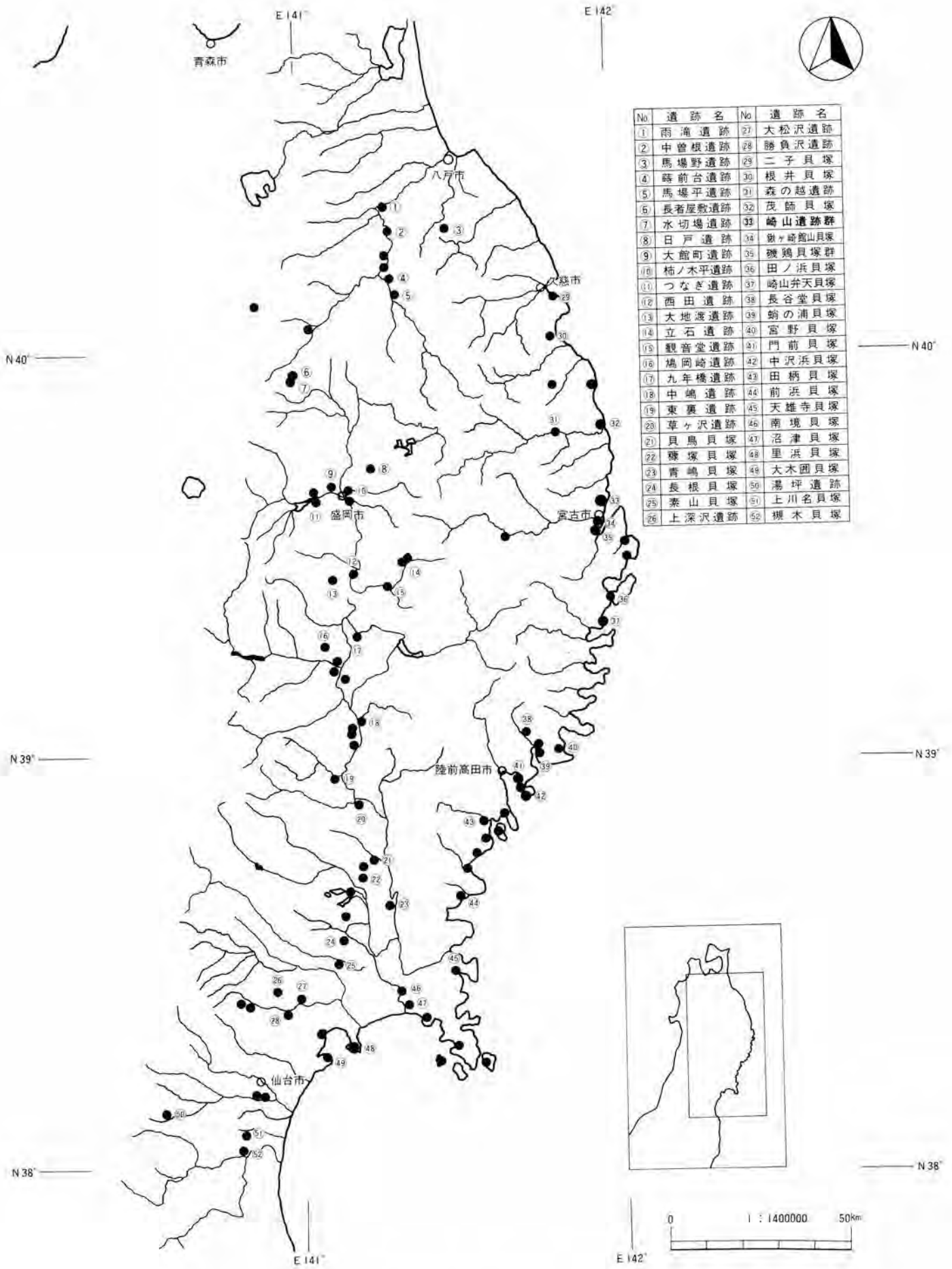
市民および県内考古学研究者を対象とし、今年度の調査成果を報告する。参加人員50名。

<地権者説明会> 平成6年1月27日

崎山貝塚の地権者に対し、崎山貝塚の内容と重要性および今後の崎山貝塚保存に向けた宮古市の方針について説明する。参加人員18名。

<地域住民説明会> 平成6年2月4日

崎山地区公民館の要請により、崎山地区の住民に対して崎山貝塚の内容と重要性および保存問題について説明する。参加人員20名。



第1図 位置図

2 調査体制

本年度の発掘調査の体制は次のとおりである。

調査主体	佐藤 勇逸	宮古市教育委員会教育長
	大森 翼	宮古市教育委員会教育次長
調査総括	岩田 善弘	宮古市教育委員会社会教育課長
事務担当	山崎 吉章	宮古市教育委員会社会教育係長
々	坂下 昇	宮古市教育委員会社会教育係主任兼社会教育主事補
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主任
々	鎌田 祐二	宮古市教育委員会社会教育係主任
々	橋本 晃一	宮古市教育委員会社会教育係主事
々	阿部 豊	宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員（非常勤）
々	工藤 剛司	宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員（非常勤）

調査の実施にあたり次の方々から御協力をいただいた。（敬称略）

<地権者> 前川克夫、後藤敏、工藤武

<発掘調査> 前川友宏、大越貞蔵、伊藤晴男、吉田昭、斉藤貞子、藤谷晶子、佐伯裕則
菅原テルミ、三浦千秋、北村忠治、佐々木茂実、菊地清八
ほかの皆さん

<整理作業> 前川友宏、成田寿美江、竹原昌江、菊池菊子、吉田昭、佐々木ヨシ子
田中初子

なお、石器の石質鑑定については佐藤二郎氏（長内水源工業K. K.）に依頼した。

II 調査内容

1 早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査

(1) これまでの調査（第3回）

早稲栃Ⅱ遺跡は、宮古市のコードL G 24-0020、岩手県のコードL G 24-0020として登録された周知の遺跡である。

昭和61年度と平成3年度に市単独事業により、また、平成4年度には国庫補助事業により遺跡の南半部にて緊急発掘調査を実施しており、それぞれ第1次～第3次と調査次数を冠してあるため、本年度の調査はこれに続けて第4次調査とした。

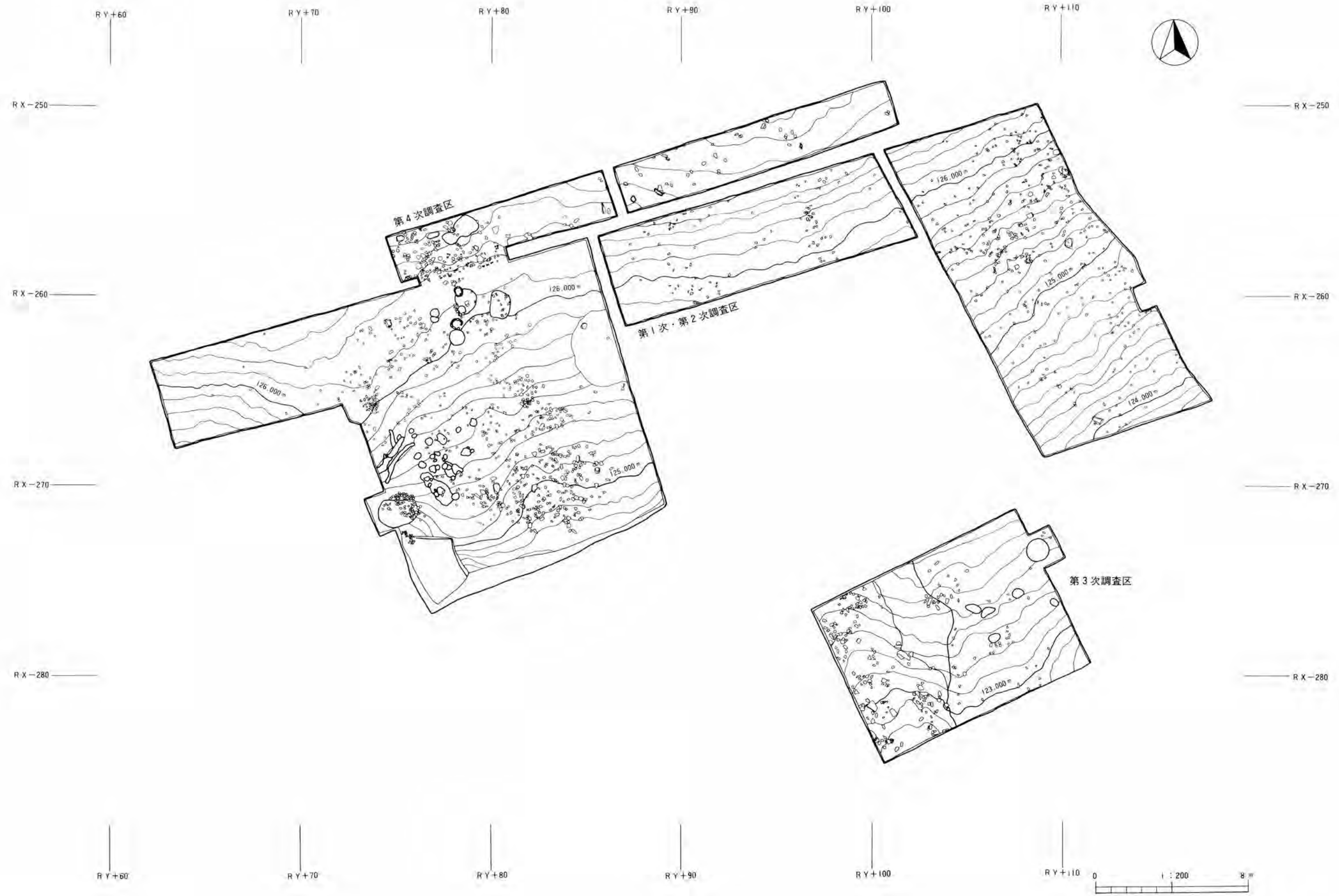
これまでの調査では、縄文時代の堅穴住居跡1棟、石囲炉2基、土壇跡4基および遺物包含層のほか、時期不明の堅穴状遺構とウマを埋葬した墓壇跡等を検出している。

第1次～第3次
調査

本年度の調査区は、第1次、第2次調査区の北側に隣接している。調査区は擁壁工事により破壊される部分のすべてを対象として設定した。



第2図 崎山遺跡群と周辺の遺跡



第3図 早稲栃Ⅱ検出遺構配置図

(2) 基本層序 (第4図)

調査区内で確認された堆積層は5層に大別される。

I層は表土層で、やや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、やや柔らかく、ややしまりがない。調査区全体を覆っている。

II層はI層より暗い黒褐色粘質土を基本土とし、礫を少量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。No.10グリッド周辺にのみ堆積する。

III層は黒色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊を含むほか礫を多く含む。柔らかく、しまりは中程度である。No.6グリッドより西側に堆積する。

IV層はやや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むほか礫を多く含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。No.4グリッドより西側に堆積する。

V層は暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊などを含むほか礫を少量含む。固さは中程度で、ややしまりがある。本層は漸移層でありNo.3グリッドより西側に堆積する。

VI層は地山層で褐色の砂礫層である。

第1次・第2次調査区との対応関係は、II層がA II層に、III層がA III層に、IV層がA IV層に相当する。

(3) 検出された遺構・遺物

No.8グリッドからNo.9グリッドにかけて土壇跡を2基確認したが、平面形がやや不整であり、掘り込みも浅いことなどから遺構ではない可能性もある。

遺物包含層は主にIII層～IV層を中心に形成されており、一部V層にも遺物を含む。但し、調査区内は攪乱が著しく、新しい時期の遺物が混入した部分も認められた。

第5号土壇跡 (第4図)

No.8グリッドのV層上面にて検出したが掘り込み面は不明である。埋土上層(A層)が黒色土を基本土とすることからIII層～IV層上面から掘り込まれたものである可能性も指摘できる。

平面形は不整円形を呈し、規模は径1.1m、深さ0.2mを計る。

埋土は2層に大別され、A層は黒色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。B層は黒褐色粘質土を基本土とする。固さ、しまりともに中程度である。

第6号土壇跡 (第4図)

No.9グリッドのV層上面にて検出した。掘り込み面については第5号土壇跡と同様である。

平面形は不整円形を呈し、規模は0.65m、深さ0.15mを計る。

埋土は2層に細分され、A1層は黒褐色粘質土を基本土とし、黒色土塊や褐色シルト塊などをやや多く含む。やや柔らかく、固さは中程度である。A2層もA1層に類似するが、やや暗く混入土がやや少ない。

遺構外出土遺物 (第5図～第7図)

調査区の東端部を除き遺物包含層が形成されていたが、特にNo.6グリッドから西のIII層～IV



RY+100

RX-250

RY+90
RX-250

RY+100
RX-255

RY+90

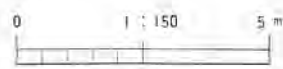
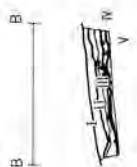
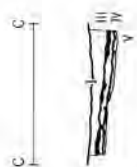
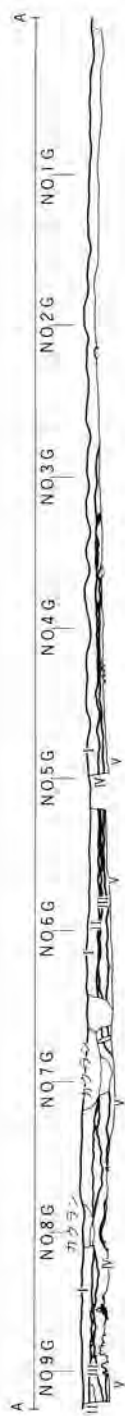
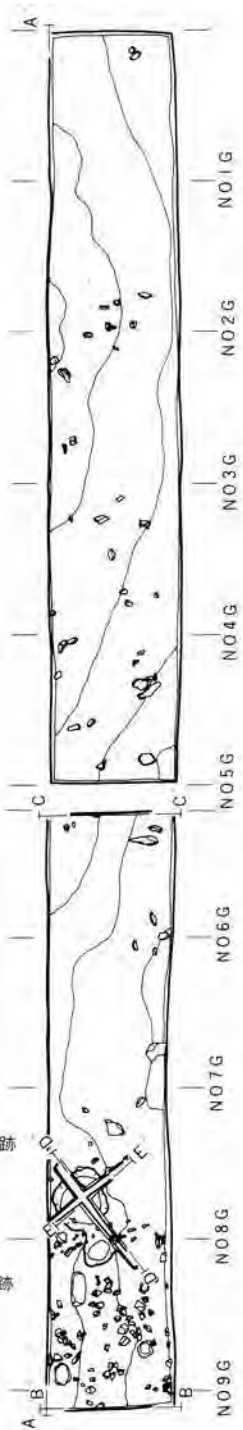
RY+80

第5号土坑跡

第6号土坑跡

RX-255

RX-260



第4図 早稻枋Ⅱ遺跡第4次調査区

層中に集中していた。

V層出土土器（1～10）

土器

1・5は磨消技法によるもので、大木9式～大木10式に伴うものである。

2は隆沈線により施文されるもので大木8b式に伴う。

6～10は縄文前期前葉に伴うもので、いずれも胎土に植物繊維を含む。6は口縁部に不整撚糸文を施すもの、7は口唇部に円形の連続刺突文を施すもの、9は結束のない羽状縄文を施すものである。

3は外面を細い沈線で施文し、内面に条痕文的な施文が認められるものである。4は貝殻文を施すものである。

IV層出土土器（11～45）

17・18は沈線により施文されるが、いずれも刺突文が伴う。19は隆沈線により施文される。これらはいずれも大木8b式に伴う。20は山形を呈する無文の口縁部破片である。

他のものは縄文前期前葉に伴うもので、いずれも胎土に植物繊維を含んでいる。

11は口縁部に山形の突起を施すもので、口縁部文様帯に不整撚糸文を施す。体部には地文としてR撚りの組縄縄文（いわゆるピッチリ縄文一註）を施す、12～16は11と同一個体と思われるものの接合はしていない。

21は口縁部文様帯に不整撚糸文を施し、体部に網目状撚糸文を施すものである。22も口縁部文様帯に不整撚糸文を施すが、体部の地文は不明である。

23～31・42は体部に不整撚糸文を施すもの、32～37は網目状撚糸文を施すもの、38～41・44は結束のある羽状縄文を施すものである。43は単節斜縄文を施すもの、45は底部付近の破片である。

III層出土土器（46～55）

54・55は隆沈線を施すもので、大木8b式に伴う。

46～53は縄文前期前葉に伴うもので、いずれも胎土に植物繊維を含んでいる。

46～48は口縁部文様帯に不整撚糸文を施すものである。49は横方向の撚糸文(?)を施すものである。

50～52は結束のある羽状縄文を施すもので、51・52は異なる原体を用いて菱形の施文となる。53は縦方向の撚糸文を施すものである。

I層出土土器（56～73）

56は隆沈線を施すもので、大木8b式に伴う。

74は沈線を施すもので、縄文中期に伴うものであろう。71は胎土に植物繊維を含んでいない。

他のものは縄文前期前葉に伴うもので、いずれも胎土に植物繊維を含んでいる。

石器（76～81）

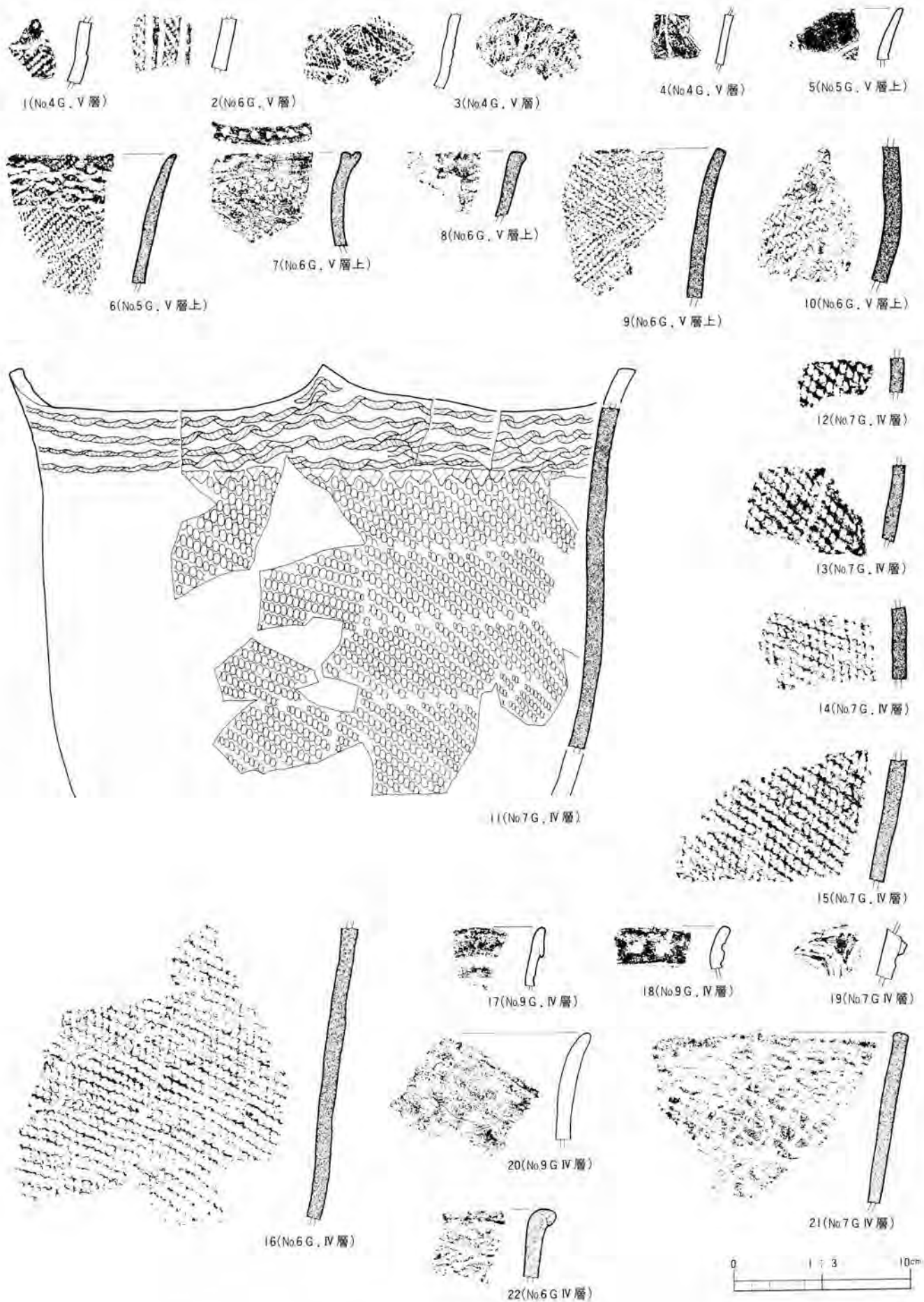
石器

78・80は横形石匙、79は縦形石匙である。81は不定形の削器であり、側縁に刀部を有する。

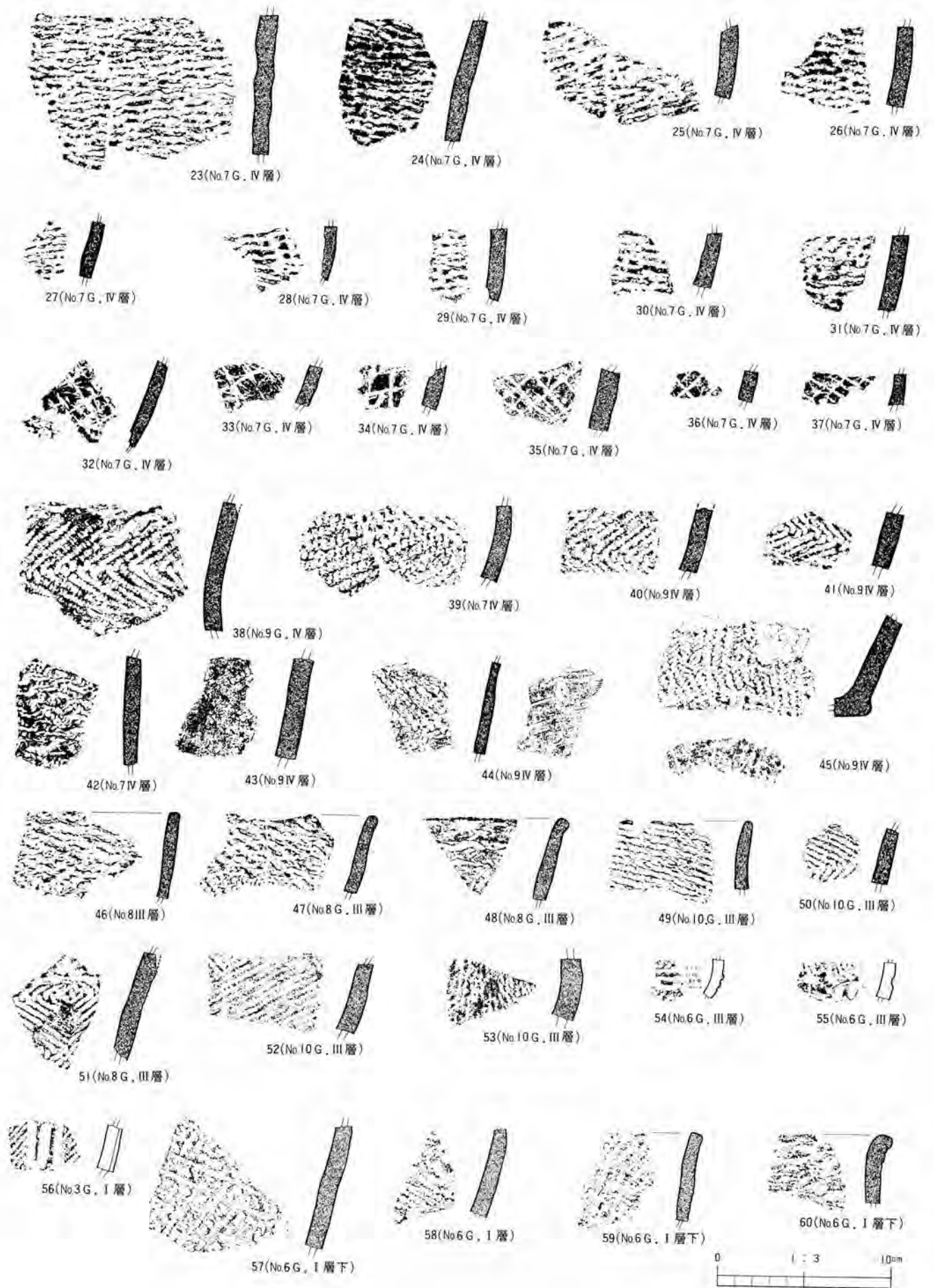
76は背面に大きく自然面を残す打製石斧であり、自然面には弱いダメージが認められる。

77は磨製石斧である。

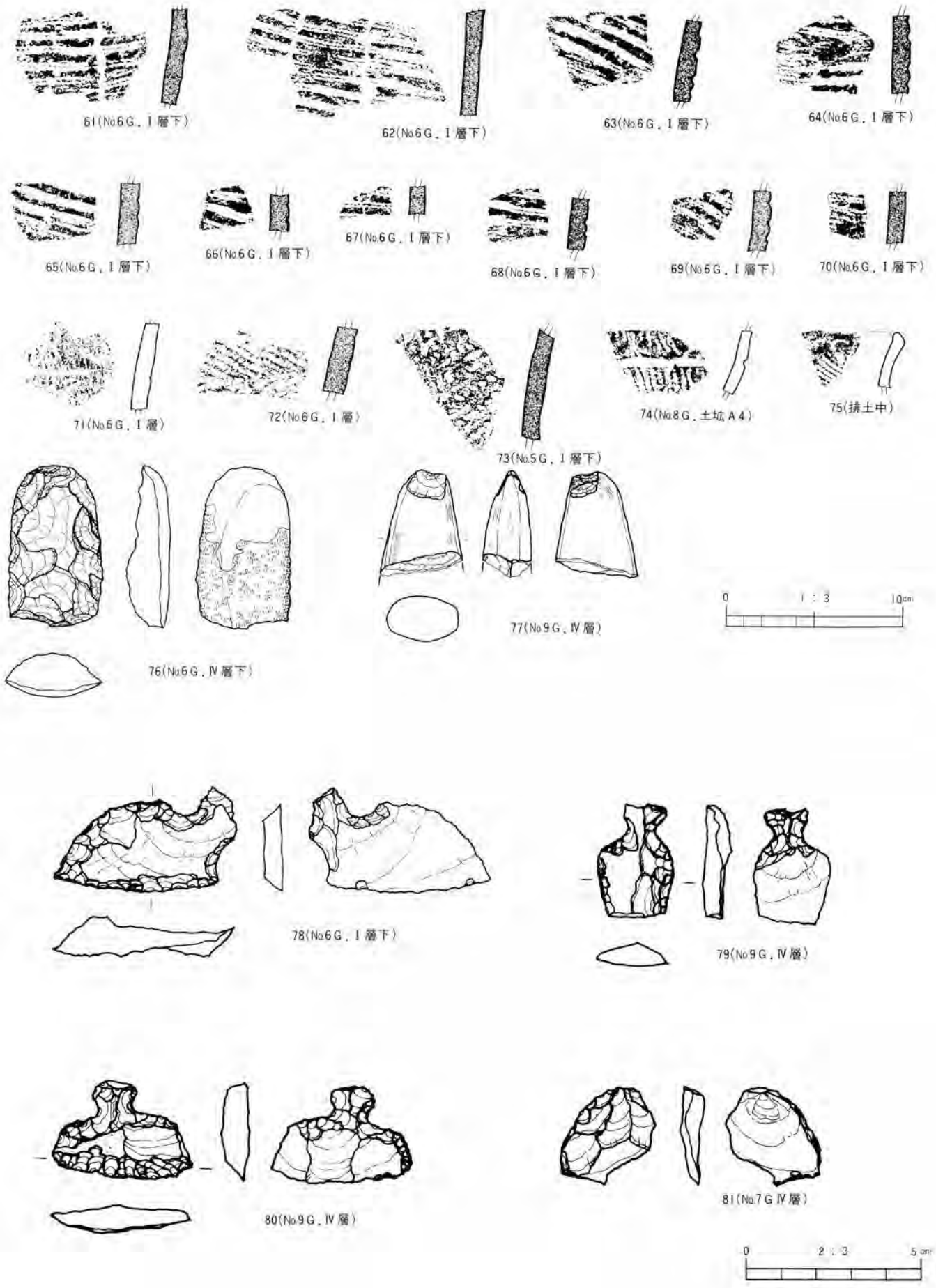
※(註)高橋亜貴子1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』より



第5図 早稻枋Ⅱ遺跡出土遺物 (1)



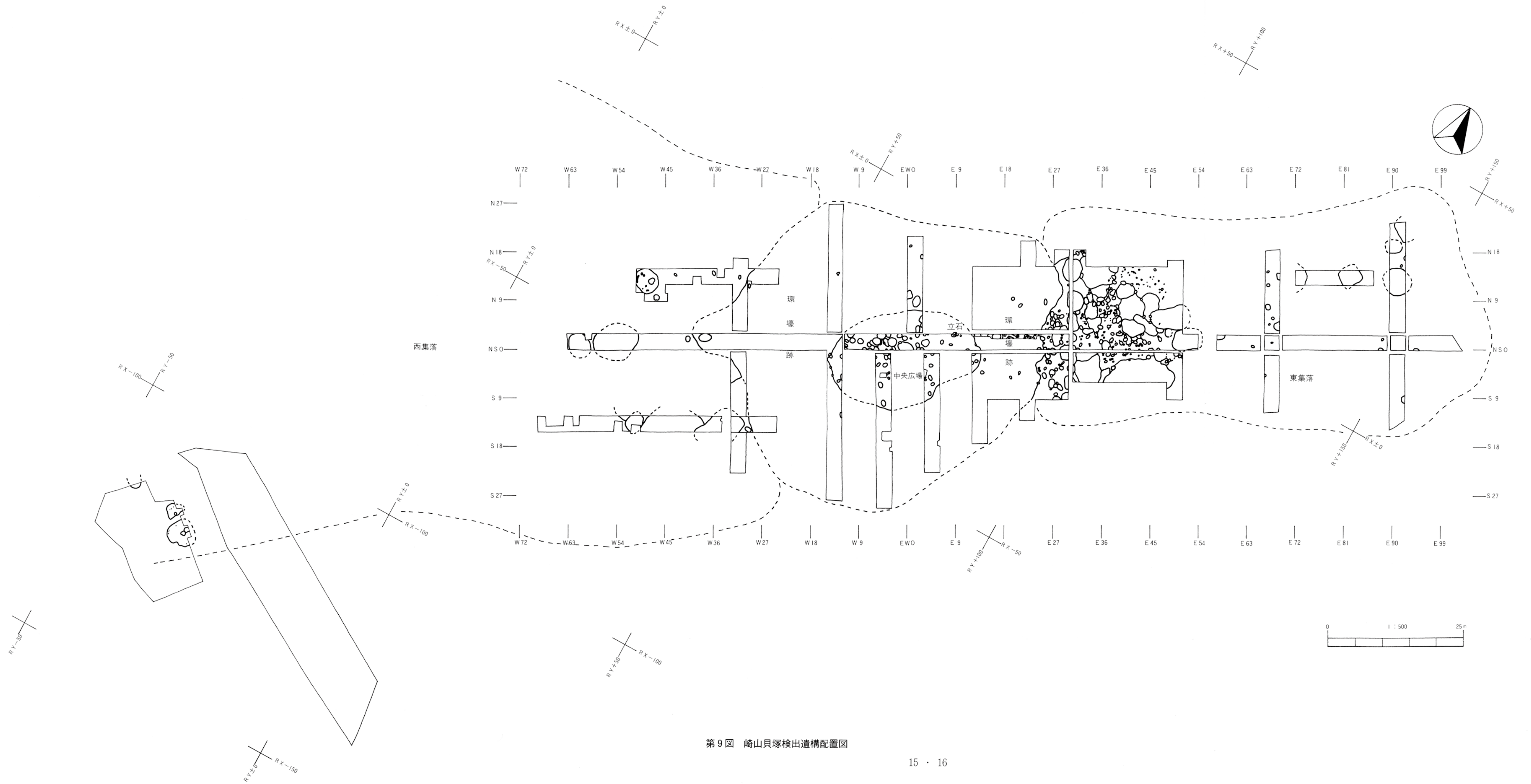
第6図 早稻栃Ⅱ遺跡出土遺物 (2)



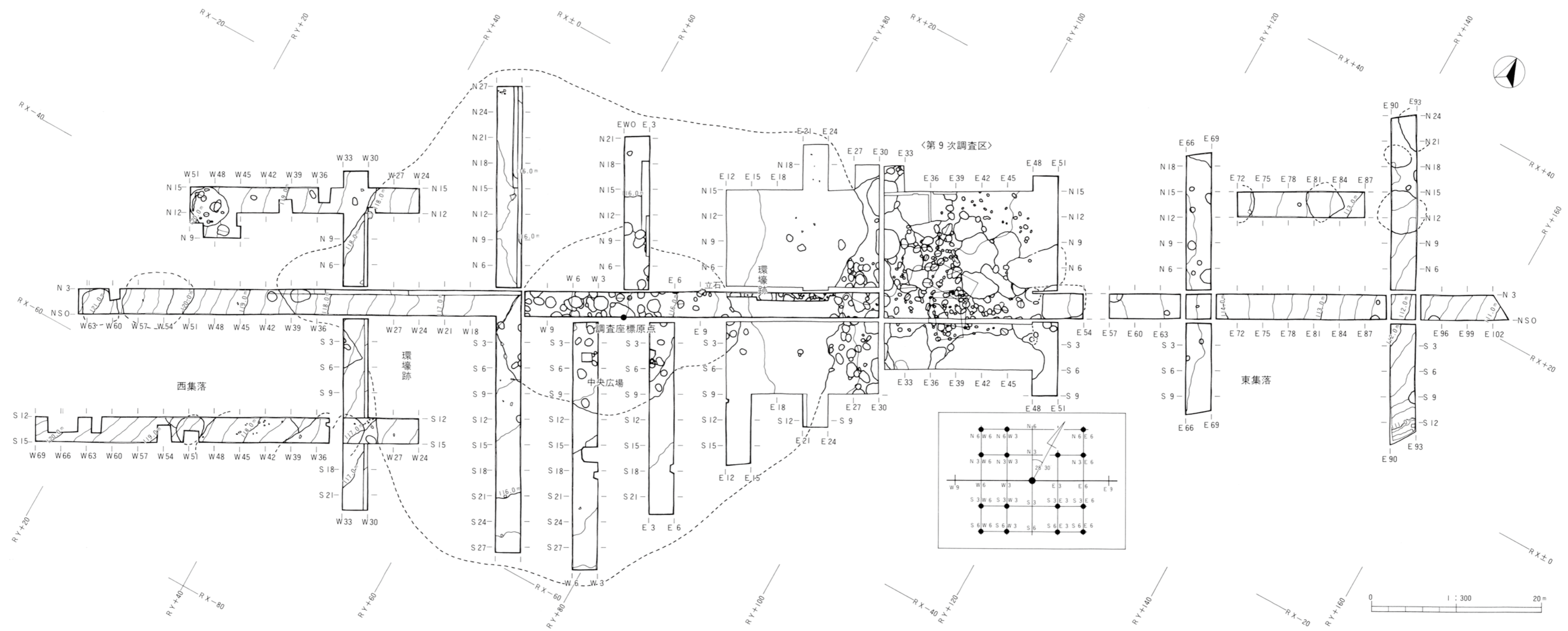
第7図 早稻枋Ⅱ遺跡出土遺物 (3)



第8図 崎山貝塚周辺地形図



第9図 崎山貝塚検出遺構配置図



第10図 崎山貝塚中央部検出遺構配置図

2 崎山貝塚第9次調査

(1) 第1次～第8次調査の概要

崎山貝塚は、宮古市のコードL G14-2079、岩手県のコードL G14-2180として登録された周知の遺跡である。

昭和61年度より実施している範囲確認調査により、崎山貝塚のアウトラインがほぼ明瞭になってきた。

南西から北東に延びる台地上の平坦面には縄文中期中葉～後葉を主体とする極めて特徴的な集落が形成されていた。これは同心円状の重層構造をとるもので、中心部に「中央広場（立石を伴う墓域）」があり、これを「環壕」がとり囲み、更に外側の東西両側には居住域としての「東集落」と「西集落」が存在している。

台地の南北両斜面部には貝塚と遺物包含層が形成されている。「南貝塚」は本遺跡の主体となる貝塚で、縄文前期を主体とした中～小規模な貝層が3地点確認しており、豊富な動物遺存体や骨角器等を検出している。「北貝塚」では集落跡とほぼ併行する時期の貝層と遺物包含層を検出している。

また、台地先端部の「東包含層」では遺物の出土量はやや少ないものの縄文前期を主体とした遺物包含層を検出している。

台地の北・東・南の三方は沢や低湿地にとり囲まれており、現在は水田（湿田）として活用されている。この地点では水場や特殊な包含層が存在する可能性が指摘できるものの、今のところ確認されてはいない。

(2) 調査の方法と目的

本年度の調査は、文化庁および岩手県教育委員会の指導により、台地頂部の「東集落」にて検出されていた柱穴状の小ピットの性格を探るとともに、「環壕」の東半部のプランを探ることを目的として広範囲の調査区を設定した。

また、「低湿地」では包含層の有無を探るために3 m×3 mのグリッドを2ヶ所設定した。

(3) 台地頂部（東集落）

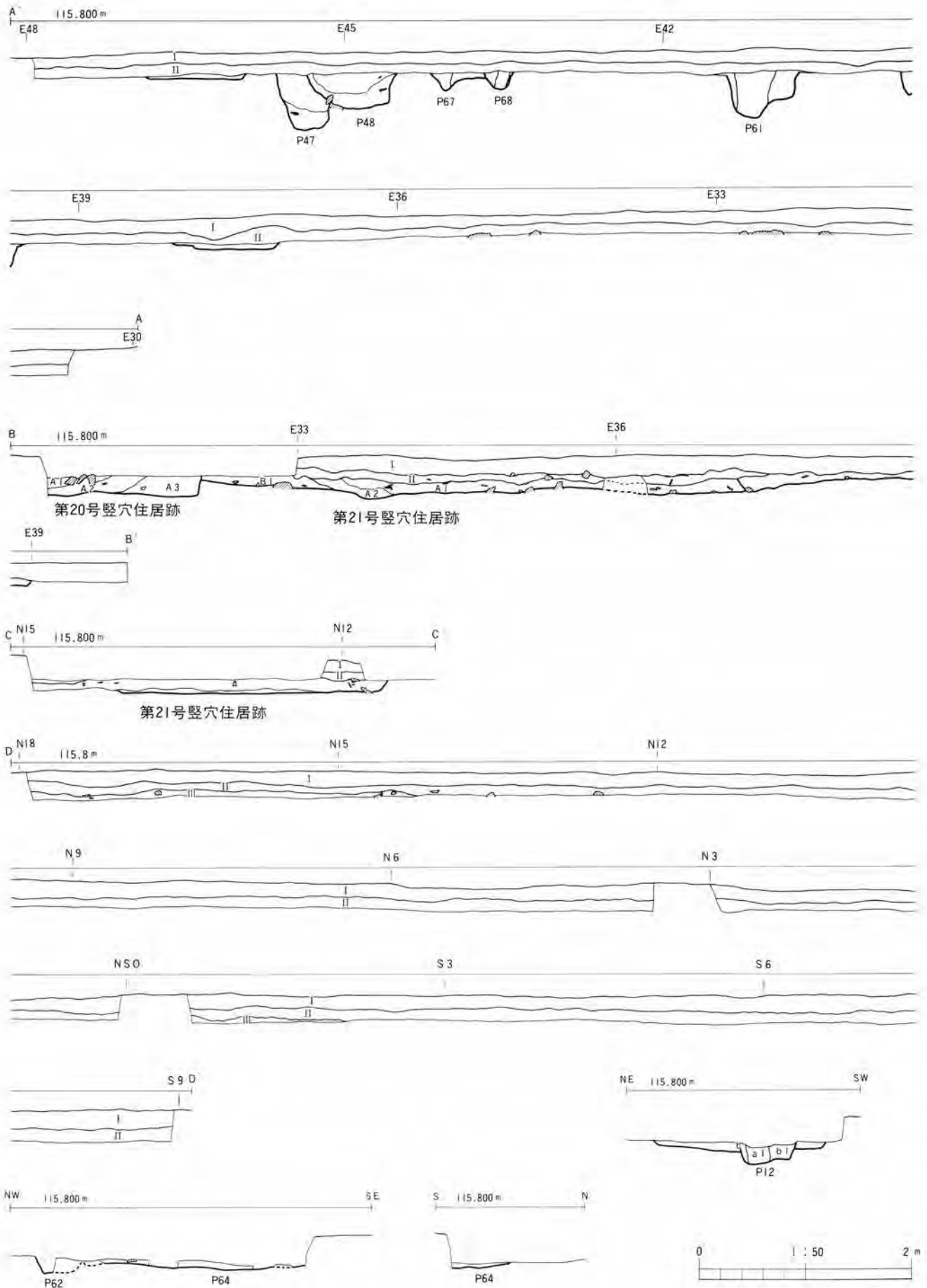
(a) 基本層序

本調査区内で確認された堆積層はⅠ層～Ⅲ層の3層に大別され、これまでの調査のⅠ層～Ⅲ層にそれぞれ対応している。

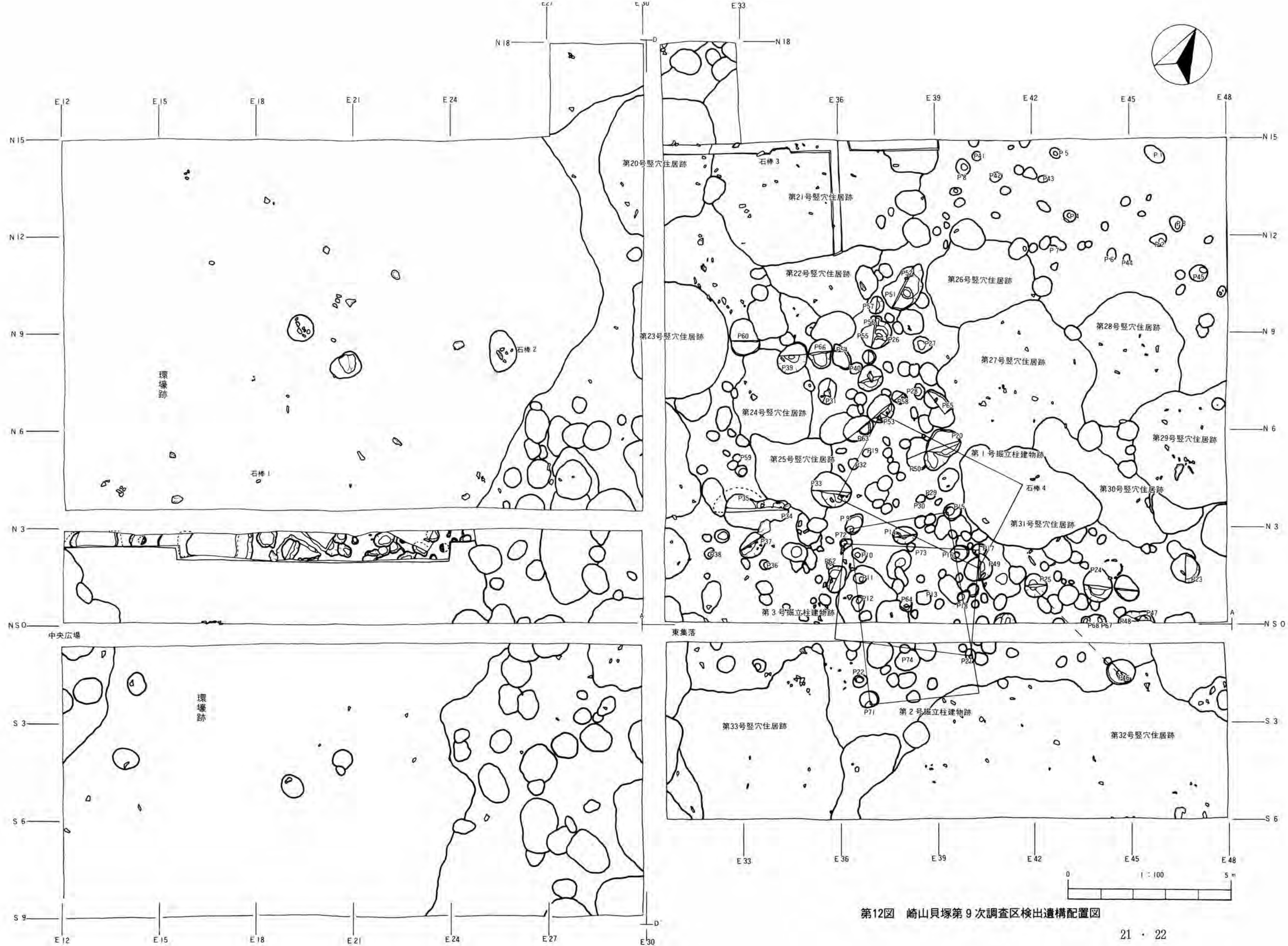
(b) 遺構の検出状況

台地頂部では西端部に「中央広場」の東辺を検出し、ここから調査区西半部にかけて「環壕」の東半部を検出した。特に「環壕」は東辺がやや不整形ながら「中央広場」をとり囲む状態で検出された。

調査区東半部は「東集落」西端部に相当し、これまで柱穴状の小ピットや土壇跡などが確認されていたが、今回の調査ではいくつかのブロック状に集中して重複する堅穴住居跡が検出さ



第11図 崎山貝塚第9次調査区土層断面図 (1)



第12図 崎山貝塚第9次調査区検出遺構配置図

れ、この間を埋めるように柱穴やフラスコ状土壙跡が密集して検出された。掘立柱建物跡も最低3棟以上確認しており特筆される。

尚、出土遺物では石棒が4点以上出土しており、なかには立ったままの状態で見出されたものもあり注目される。

(c) 検出された遺構・遺物

環壕跡（第12図）

N3E15～S6E15グリッドに西縁を、N15E30～S9E24グリッドに東縁を検出した。平面形はやや不整形ではあるが、中央広場をとり囲む形で検出されている。

今回の調査にて環壕跡の東側のプランがほぼ確定した。

第20号堅穴住居跡（第11図・第13図）

N15E30・N18E30・N15E33・N18E33グリッドにかけて検出した。第21号堅穴住居跡を切る。サブトレンチでの調査のみに留めたため詳細は不明である。

平面形は不整の隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で4.4m、南西-北東方向で3.5m、深さ0.2mを計る。

トレンチ内の埋土は、A1層～A3層に細分される。いずれも黒褐色～暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。A1層はやや柔らかくややしまりがなく、A2層・A3層はやや固くしまりは中程度である。

出土遺物は少なく、59は地文を施す体部破片であり時期を特定できない。ただし、第21号堅穴住居跡を切ることから大木9式以降に伴うものと思われる。

第21号堅穴住居跡（第11図、第13図）

N15E33～N15E39、N12E33～N12E39グリッドにかけて検出した。第20号堅穴住居跡に切られ、第22号堅穴住居跡を切る。サブトレンチでの調査のみに留めたため詳細は不明である。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は北西-南東方向で6.0m、南西-北東方向で6.5m、深さ0.2mを計る。

トレンチ内の埋土は、A層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含むが、A1層はやや明るく固い。しまりは両層ともに中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや固く、しまりは中程度である。

出土遺物（60～69）

60～63は磨消技法によるもので、縦位の区画文を施す。60は沈線により、61は隆起線により渦巻文を施す。これらはいずれも大木9式に伴う。

64・66～68は隆沈線により渦巻文等を施すもので大木8b式に伴う。

65は地文のみを施すもの、69は横位の沈線を施すものである。

このほか石棒（282）が出土しており、これについて後述する。

第22号堅穴住居跡（第13図）

堅穴住居跡

N12E36・N12E39グリッドにかけて検出した。第21号堅穴住居跡に切られ、また、検出のみに留めたために詳細は不明である。規模は北西-南東方向で3.5m以上、南西-北東方向で2.0m以上である。出土遺物は無い。

第23号堅穴住居跡（第14図）

N12E30・N9E30・N12E33・N9E30グリッドにかけて検出した。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で3.5m、南西-北東方向で3.0mを計る。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

第24号堅穴住居跡（第14図）

N9E33・N9E36グリッドにかけて検出した。第25号堅穴住居跡に切られ。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で2.8m、南西-北東方向で2.5mを計る。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

第25号堅穴住居跡（第14図）

N6E36グリッドに検出した。第24号堅穴住居跡を切る。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で2.5m、南西-北東方向で2.6mを計る。

出土遺物は87が磨消技法によるもので大木9式に伴うと思われる。88は隆沈線により施文されるもので大木8b式に伴う。

第26号堅穴住居跡（第14図）

N12E39～N12E45グリッドにかけて検出した。第27号堅穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明である。

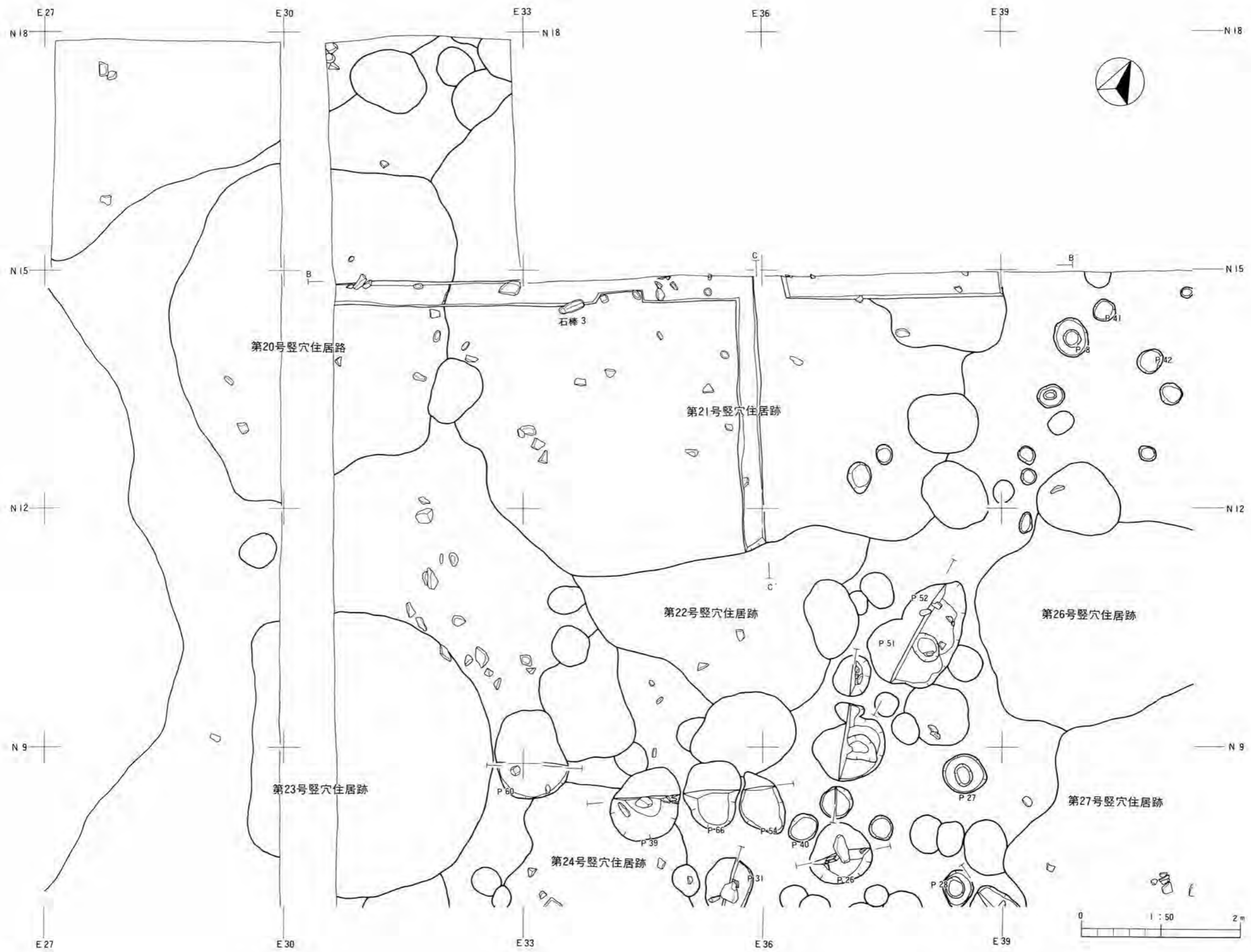
平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で2.7m、南西-北東方向で3.3mを計る。

出土遺物は76が横位の平行沈線文を施すもので大木8b式に伴うと思われる。

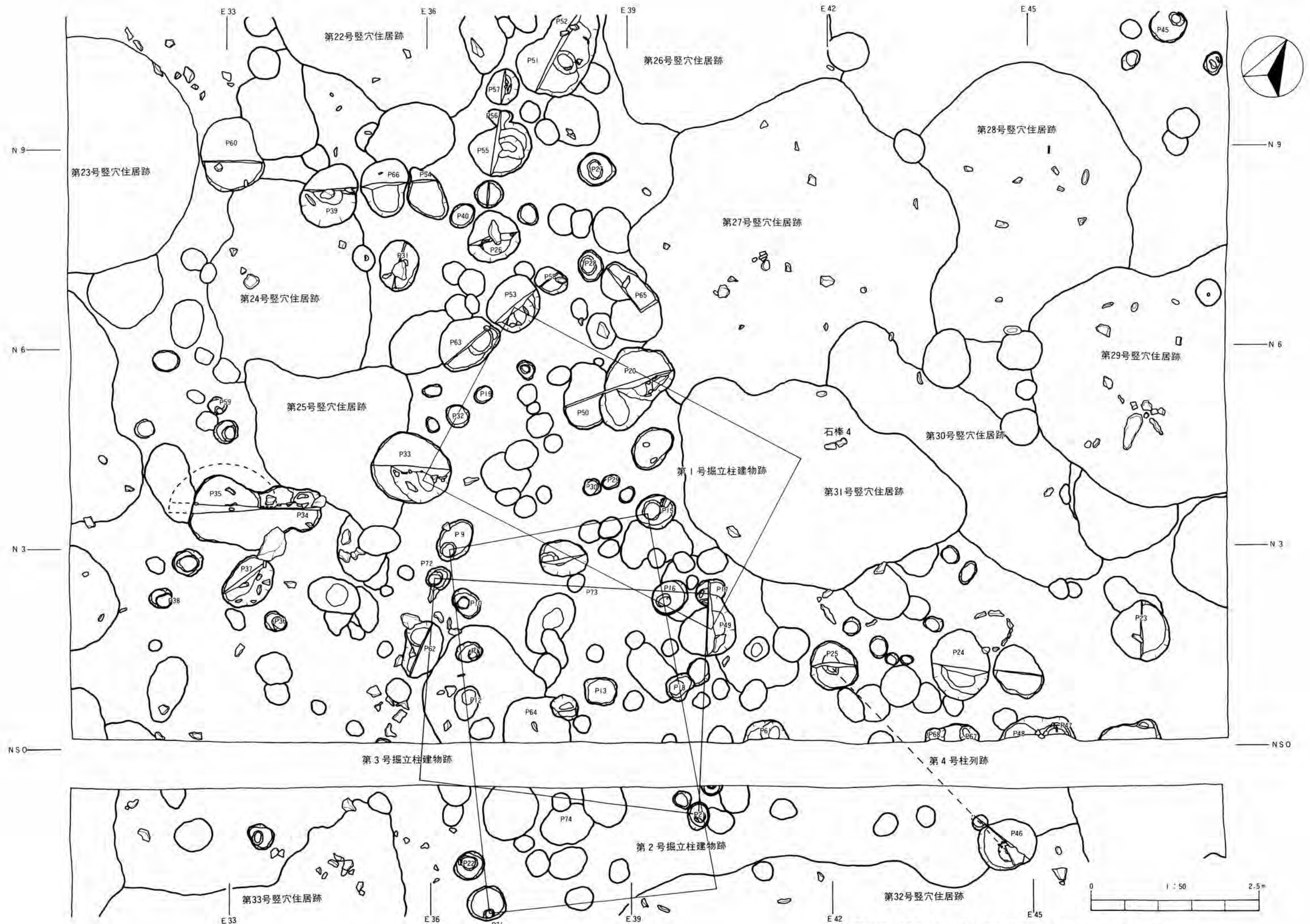
第27号堅穴住居跡（第14図）

N6E42～N12E42、N6E45～N12E45グリッドにかけて検出した。第26号堅穴住居跡・第28号堅穴住居跡を切り、第30号堅穴住居跡・第31号堅穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整形を呈し、規模は北西-南東方向で4.7m、南西-北東方向で5.0mを計る。



第13図 崎山貝塚第9次調査区検出遺構 (1)



第14図 崎山貝塚第9次調査区検出遺構 (2) 27 · 28

出土遺物は77が沈線による磨消技法により施文されるもので、78が隆起線による磨消技法により施文されるものである。これらは大木10式に伴う。

第28号堅穴住居跡（第14図）

N 6 E 45～N12 E 45、N 9 E 48～N12 E 48グリッドにかけて検出した。第27号堅穴住居跡・第29号堅穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明である。平面形は不整楕円形(?)を呈し、規模は北西－南東方向で4.0m、南西－北東方向で3.5mを計る。

出土遺物は78が隆沈線による渦巻文を施すもので大木 8 b 式に伴う。

第29号堅穴住居跡（第14図）

第3次調査で検出したN 9 E 51－1号堅穴住居跡と同一の住居跡と思われる。

N 6 E 48、N 9 E 48グリッドにかけて検出した。第28号堅穴住居跡・第30号堅穴住居跡を切る。検出のみに留めたため詳細は不明である。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は北西－南東方向で3.8m、南西－北東方向で5.8m以上を計る。

出土遺物（55～58）

55は底部を欠く浅鉢で、口縁部が強く内湾している。口縁部文様帯には横位1条の隆起線を施し、この上下に円形の連続刺突文を施す。体部文様帯には隆起線による波頭状のモチーフを6単位施し、この内部をL－R単節斜縄文にて充填している。また、隆起線に沿った部分は磨消されている。

55・57もほぼ同様なものであり、55と同一個体片である可能性が大きい。

58は縄文のみを施す浅鉢である。

第30号堅穴住居跡（第14図）

N 3 E 45～N 6 E 45、N 3 E 48～N 6 E 48グリッドにかけて検出した。第27号堅穴住居跡を切り、第29号堅穴住居・第31号堅穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明であるが、平面形が他の堅穴住居跡と著しく異なり堅穴住居跡ではない可能性も有る。

平面形は長楕円形を呈し、規模は東西5.3m、南北1.8mを計る。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

第31号堅穴住居跡（第14図）

N 3 E 42・N 6 E 42・N 3 E 45・N 6 E 45グリッドにかけて検出した。第27号堅穴住居跡・第30号堅穴住居跡を切る。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整形を呈し、規模は北西－南東方向で3.0m、南西－北東方向で4.2mを計る。

出土遺物は石棒（281）があるが後述する。

第32号堅穴住居跡（第14図）

第3次調査区で検出したS 6 E 51－1号堅穴住居跡と同一である可能性が大きい。

S 3 E 39～S 3 E 48、S 6 E 39～S 6 E 48グリッドにかけて検出した。かなり大規模な堅穴住居跡であるが、検出面での重複は確認できなかったのでひとつの堅穴住居跡として扱うこととする。

平面形は不明であり、規模は北西－南東方向で4.9m以上、南西－北東方向で13mを計る。

出土遺物は(91～101)

91・100・101は磨消技法によるもので、大木9式に伴うと思われる。他のものはいずれも隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

第33号堅穴住居跡(第14図)

S 3 E 33・S 3 E 36・S 6 E 33・S 6 E 36グリッドにかけて検出した。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形(?)を呈し、規模は北西－南東方向で4.3m、南西－北東方向で4.4mを計る。

出土遺物は(103～108)

103～107はいずれも磨消技法によるもので、モチーフは一樣ではないがおおむね大木9式を主体とするようである。

108はミニチュア土器の底部付近である。

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第14図・第15図)

N 3 E 39・N 3 E 42・N 6 E 36～N 6 E 42・N 9 E 39グリッドにかけて検出した。

ほぼ東西棟で、主軸方向は $W 2^{\circ} S$ となる。桁行は2間で、南側柱筋はP 33とP 14が2.2m、P 14とP 47が2.65m、北側柱筋はP 53とP 20が2.4mで、北東の妻柱は第31号堅穴住居跡に切られており検出できなかった。梁間は1間で、P 33とP 53が2.95mとなる。

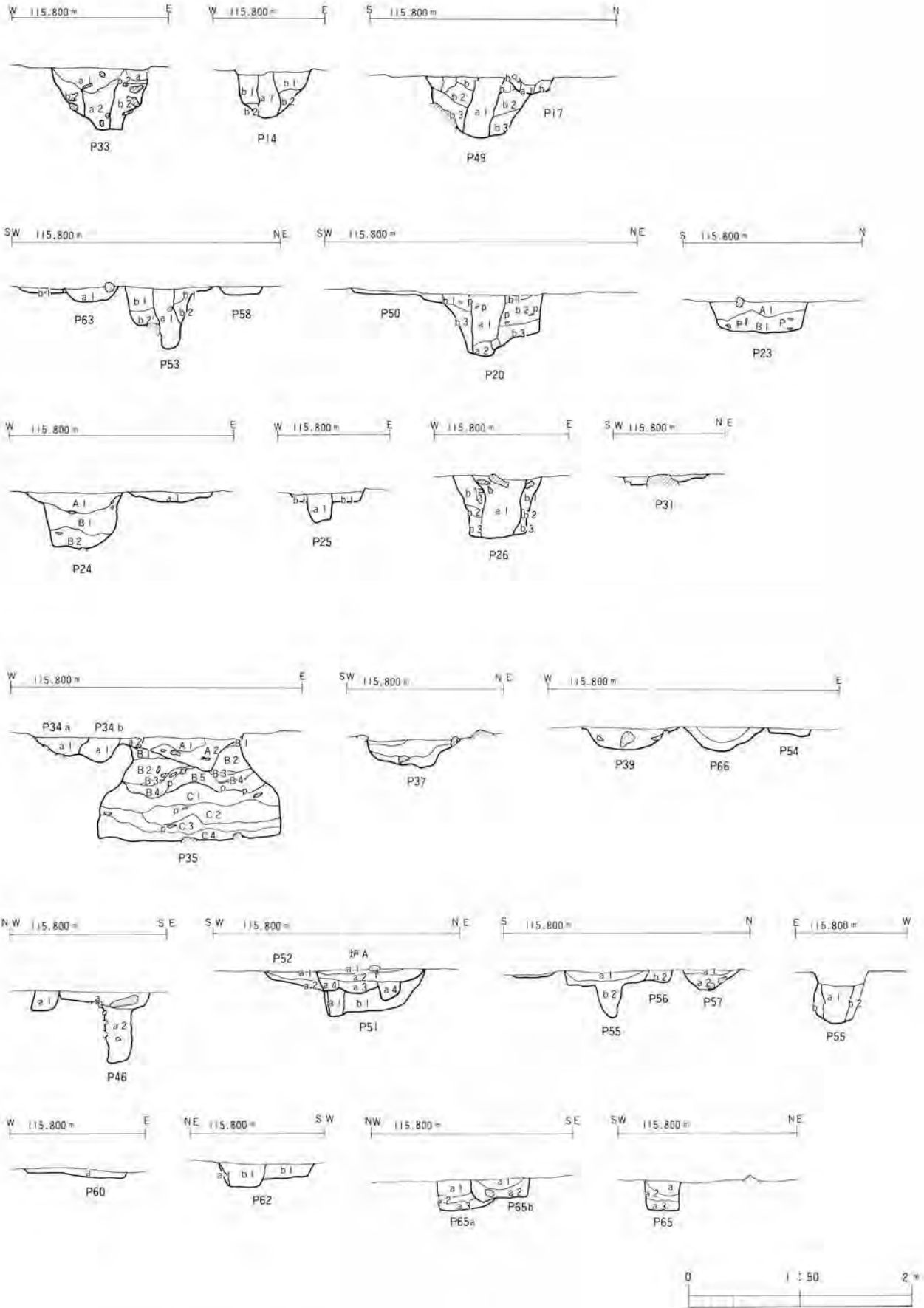
建物跡内部には炉跡等の付属施設は確認されていない。

柱穴は、いずれも柱痕跡を確認している。

P 33は第25号堅穴住居跡を切る。開口部径0.86m、深さ0.55m、柱痕跡径0.25mとなる。埋土はa 1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土粒や炭化物粒を微量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。a 2層は柱痕跡で、掘り方(b層)より暗い褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。b層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固く、しまりは中程度である。

P 14は開口部径0.7m、深さ0.43m、柱痕跡径0.2mとなる。埋土はa 1層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、やや暗い暗褐色土を含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。b 1層のほうがやや明るい。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

P 49はP 17に切られる。開口部径0.97m、深さ0.55m、柱痕跡径0.25mとなる。埋土はa 1層が暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や炭化物粒を微量含む。やや固く、しまりは中程度である。b層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や黄褐色土塊などをやや多く含むが、b 3層はやや暗い。いずれも固く、しまりは中程度である。



第15図 崎山貝塚第9次調査区土層断面図 (2)

P53は開口部径0.8m、深さ0.53m、柱痕跡径0.2mとなる。埋土はa1層暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などや炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b層も暗褐色粘質土を基本土とするが、褐色土塊などをやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。b1層はやや明るい。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

P20は第27号堅穴住居跡・P50を切る。開口部径0.9m、深さ0.55m、柱痕跡0.32mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含むほか、炭化物粒を少量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。a2層は褐色粘質土を基本土とする地山ブロックである。b層はb1層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や炭化物粒を少量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。b2層・b3層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むが、特にb3層に多い。両層ともしまりは中程度であるが、b3層がやや多い。

出土遺物は20・21がP14から出土したもので、20は磨消技法による。22・23・24はP20から出土したもので、22・23は磨消技法によるが、22は隆起線上に連続刺突文を施す。24は隆沈線により施文される。44はP49から出土したもので、隆沈線により施文される。53・54はP53から出土したもので、54は平行沈線間に円形の連続刺突文を施す。

これらの遺物はやや時間幅があるが、20・22・54が最も新しいもので大木10式に伴うと思われる。従って建物跡もこの時期に伴うものであると思われる。

第2号掘立柱建物跡（第11図・第14図）

N3E39～N6E39・N3E42～N6E42グリッドにかけて検出した。

南北棟で、主軸方向はN35°Wとなる。桁行は2間で、南側柱筋はP9とP12が2.2m、P12とP71が3.25m、東側柱筋はP15とP18が2.66mで、南東の妻柱は第32号堅穴住居跡と重複し確認できなかった。梁間は1間で、P9とP15が3.03mとなる。

建物跡内部には炉跡等の付属施設は確認されていない。

柱穴は、第1号堅穴住居跡に比して著しく小形であるもののいずれも柱痕跡を確認している。

P12のみ断割っており、他のものは一段下げた状態で柱痕跡を確認した。P12は開口部径（長軸）0.55m、深さ0.2m、柱痕跡径0.22mを計る。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。b1層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

他のものは開口部径0.6～0.4m、柱痕跡径0.25～0.15m程度である。

出土遺物は極めて少なく図示できるものはない。

第3号掘立柱建物跡（第14図）

N3E39・N3E42・N3E42グリッドにかけて検出したが、一隅の柱穴が未確認であるため不確実ではあるが、仮に建物跡としておく。

東西棟で、主軸方向はW26°Sとなる。桁行は2間で、北側柱筋はP72とP73が2.1m、P73とP17が2.0m、南側柱筋はP74とP21が2.1mとなる。梁間は1間で、P17とP21が3.3mとなる。

建物跡内部には炉跡等の付属施設は確認されていない。

柱穴は第1号建物跡に比して著しく小形であり、P72・P17・P21にて柱痕跡を確認している。断割ったのはP17のみである。P17は第1号建物跡のP49を切る。開口部径0.45m、深さ0.1m、柱痕跡径0.15mである。埋土はa1層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、やや暗い暗褐色土塊を含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b1層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。

他のものは開口部径0.4～0.3m、柱痕跡径0.2～0.15mである。

出土遺物は極めて少なく図示できるものはない。

第4号柱列(?) (第14図)

N3E42・N3E45・N3E45にかけて検出した。P25とP46の2つの柱穴に構造上の類似性が認められたためにこれらを一括しておく。しかし、周辺に同様な柱穴が認められず、建物跡として復元できなかったのが柱列と仮称しておく。

P25は掘り方が浅く柱痕跡が深い2段掘りになっており、開口部径0.7m、掘り方の深さ0.13m、柱痕跡の深さ0.27m、柱痕跡径0.23mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b1層は褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む、固さ、しまりともに中程度である。

P46はP25の東3.7mに位置し、P25に類似した断面形を呈す。開口部径0.8m、掘り方の深さ0.13m、柱痕跡の深さ0.64m、柱痕跡径0.25mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。a2層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

柱列

柱穴跡 (第12図)

今回の調査区東半部つまり東集落西端部には柱穴跡や土壌跡と思われるピット類が多数存在している。このうち建物跡を復元できたものは前述したとおりであるが、これら以外にも明らかに柱痕跡を有するものが存在する。例えばP26はやや大形のもので、第1次掘立柱建物跡に匹敵する規模のものである。他のものはやや小形で、第2号掘立柱建物跡・第3号掘立柱建物跡クラスのものである。

柱痕跡を有するものは平面図に図示してあるが、時間的制約によりすべてのピット類を精査したわけではないので、柱穴の実数は更に増すものと思われる。

柱穴跡

土壌跡

やや大型のピット類のうち明らかに柱痕跡を持たないものがある。貯蔵穴に相当するものであろう。

P35 (第14図)

N6E33、N6E36グリッドにかけて検出した。P34・P37に切られる。断面形はフラスコ

土壌跡

形を呈し、開口部径1.0m、頸部径1.0m、底面径1.63m、深さ0.92mとなる。

埋土はA層～C層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。固さ、しまりともに中程度である。B3層は炭化物粒をやや多く含む。また、B4層とB5層は焼土層であるが、この地点で焼成を受けたものではなく二次的に堆積した層である。

C層も褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含むが、B層に比して著しく固い。また、やや暗い層と明るい層が互層になり堆積している。ややしまりが無い。

出土遺物（1～17）

C2層～C4層にかけてややまとまって遺物が出土している。第16図中埋土遺物としたものはすべてこれらの層から出土したものである。また、図示した以外に自然礫（扁平円礫）も多数出土している。

1・5・16はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯に隆沈線による渦巻文と横位楕円形区画文を施す。5は地文として縄文を施すが、1は縦位の刻目を充填している。頸部は無文帯とし、体部文様帯には大渦巻文を施すが、他の施文要素との連結が集み閉鎖性の強い施文となる。

2～4は体部に弱い膨らみを有する深鉢である。2は体部中央に上下に貫通孔を有する小突起を2単位有する。体部文様帯は隆沈線により上半部に大渦巻文・下半部に小渦巻文と懸垂文を施すが、施文要素間の連結が著しく縦位の区画文を作出す閉鎖的な施文となる。

3・4は平行沈線により懸垂文を施すが、やはり施文要素間の連結が著しく縦位の区画文を作出す。尚、沈線間は磨消されていない。

6・7は口縁部の内湾する深鉢で、隆沈線あるいは隆起線により施文される。

8～15は隆沈線により施文されるもので、2に類似するものであろう。

17は平行沈線により施文されるが、やはり沈線間を磨消しない、3・4に類似するものであろう。

以上、これらの遺物は形式的にもまとまりを有するもので、大木8b式の最終段階に伴う。

P23（第14図）

N3E48グリッドに検出した。開口部径0.9m、深さ0.3mで、壁はやや外傾している。

埋土はA層とB層に大別される。A1層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。B1層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊をやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。いずれの層からも土器片が少量出土している。

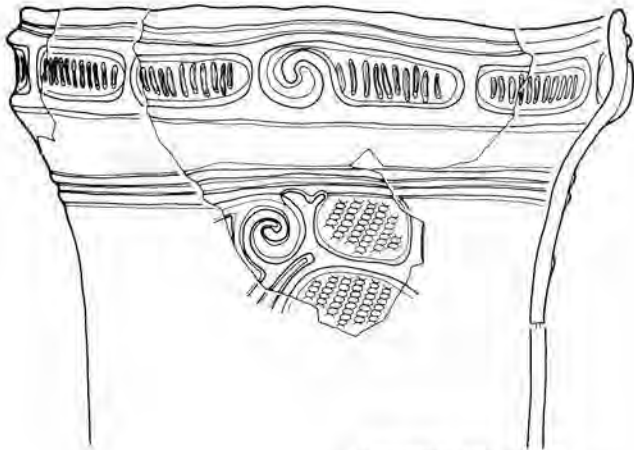
出土遺物（25～33）

25は縦位2条の隆起線上に連続刺突文を施すものである。20・30は磨消技法により企画文を施すものである。これらは、大木9式～大木10式に伴うものであろう。

他のものはこれらよりやや古い段階のものである。

P24（第14図）

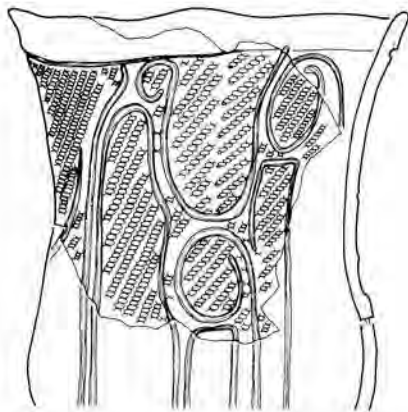
N3E45グリッドに検出した。N3E45-1号炉跡を切る。開口部径1.03m、深さ0.5mで、



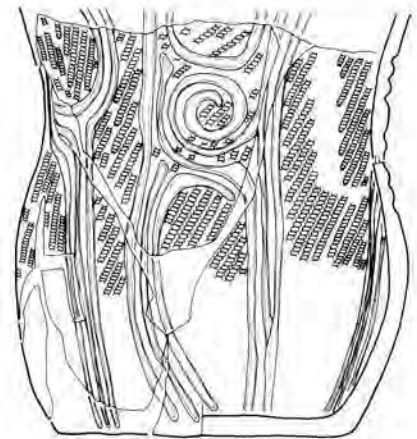
1(N6E36G, P35-C2層)



2(N6E36G, P35-C2層)



3(N6E36G, P35埋土)



4(N6E36G, P35埋土)



5(N6E36G, P35埋土)



6(N6E36G, P35-C4層)



7(N6E36G, P35-C4層)



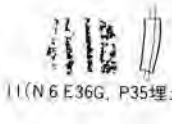
8(N6E36G, P35-C4層)



9(N6E36G, P35埋土)



10(N6E36G, P36埋土)



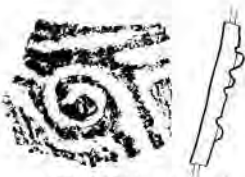
11(N6E36G, P35埋土)



12(N6E36G, P35埋土)



13(N6E36G, P35埋土)



14(N6E36G, P35埋土)



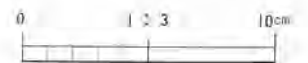
15(N6E36G, P35埋土)



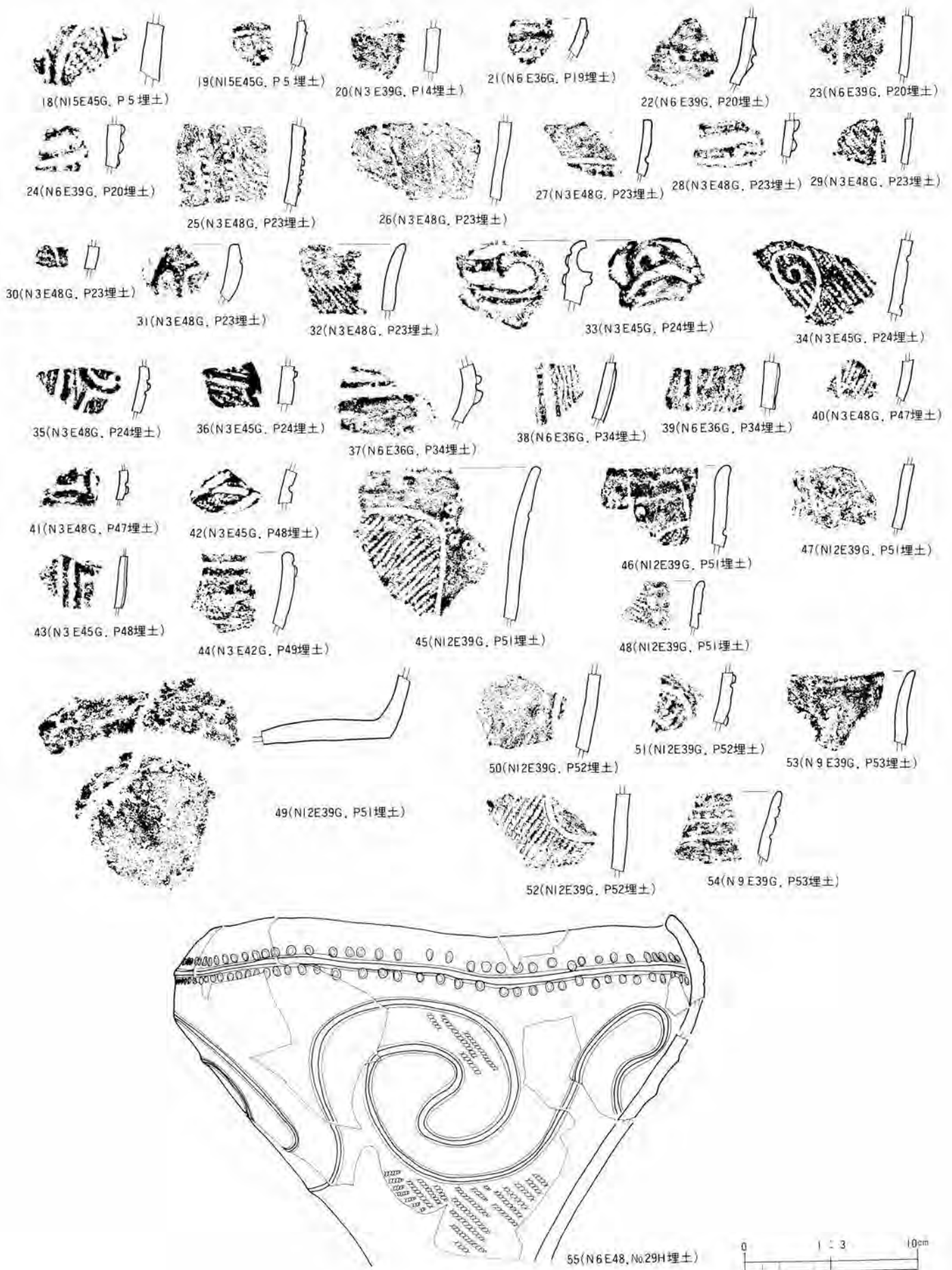
16(N6E36G, P35埋土)



17(N6E36G, P35埋土)



第16図 崎山貝塚出土遺物 (1)



第17図 崎山貝塚出土遺物 (2)



第18図 崎山貝塚出土遺物 (3)

壁はゆるやかに外傾しながら立上り、開口部付近で強く外傾する。

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色土塊を含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含むが、B2層はやや混入量が少ない。固さ、しまりともに中程度である。

出土遺物（34～36）

34は沈線により渦巻文を施すものである。35・36は隆沈線により渦巻文等を施すものである。これらは大木8b式に伴う。

遺構外出土遺物（第19図～第24図）

粗掘り～遺構検出作業中に出土した遺物である。検出作業中に環壕上面から出土した遺物は、これに伴う可能性が大きい。他のものは遺構を特定できないものが大半である。このため、層位的にまとまりを持たない資料として一括して扱う。

土器（第19図～第21図）

256は無文の土器の底部付近で丸底を呈する。小片であり判然としないが、ロクロ使用以前の土師器かと思われる。

183は平行沈線により施文されるものであるが、縄文後期に伴うものかと思われる。

73・118～121・122・137・181・210・223～227は磨消技法によりもので、モチーフは不明であるが、沈線を施すものと隆起線を施すものの2者がある。大木10式に伴うものと思われる。

140～142・149・151・159・228～234も磨消技法によるが、縦位の区画文等を施すもので、大木9式に伴うものと思われる。

81は口縁部に縦位2条の粘土紐を貼付け、この上面を篋状工具で刻むもので、大木7a式に伴うと思われる。

他のものは隆沈線や平行沈線により施文されるもので、おおむね大木8b式に伴うと思われる。

石器（第22図～第23図）

剥片石器のうち定形的なものはほぼ図示したが、礫石器の大部分は時間的制約から図示できなかった。後日改めて報告したい。

258・259は石錐である。いずれもやや大きめの基部を有する。石材は両者ともに凝灰岩質粘板岩を使用している。

260は石槍で、やや肉厚の菱形を呈する。石材はチャート質泥岩を使用している。

261～269は石鏃である。26はやや長身で、両側縁の基部付近にわずかな珓入がみられる。基部は無柄の凹基である。

262・263は木葉形を呈する有柄鏃である。

264～269は三角鏃である。264～266は基部の珓入が比較的小さいもので、267・268は比較的深いものである。269はやや不整形であるが平基である。

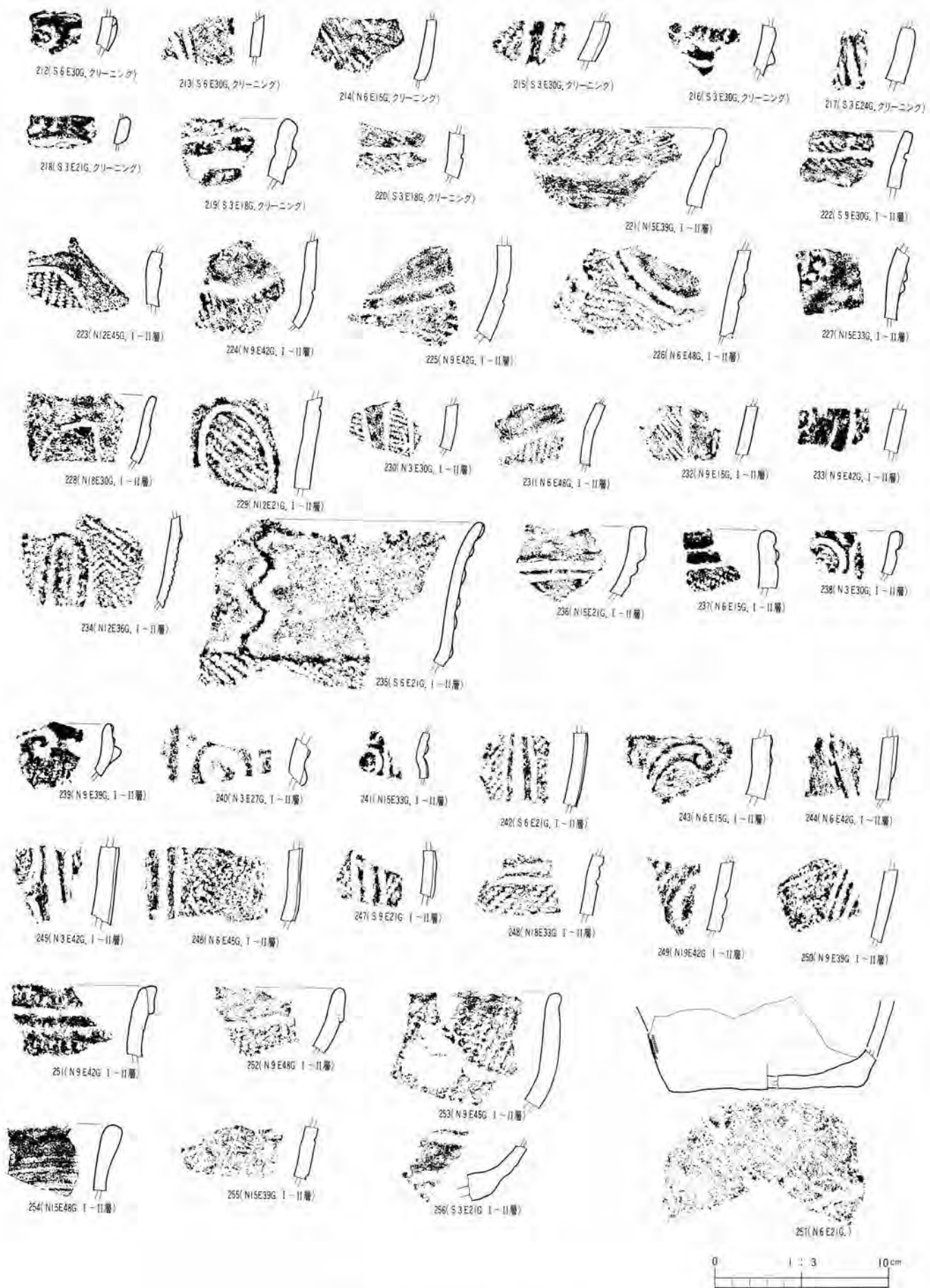
石材は261・265・267が粘板岩を、262・266がチャート質泥岩を、263・268・269がチャートを、264が凝灰岩質粘板岩を、それぞれ使用している。



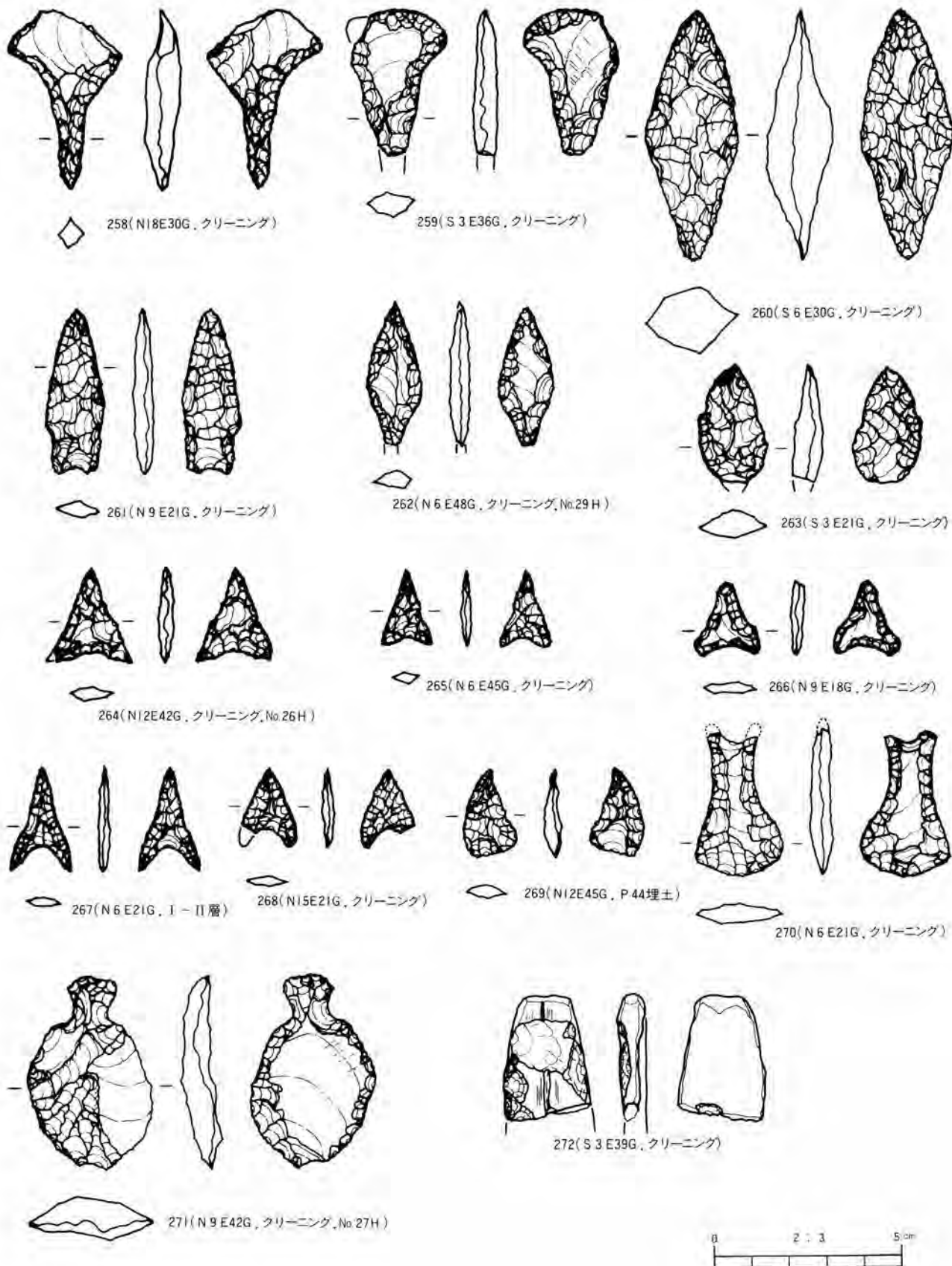
第19図 崎山貝塚出土遺物 (4)



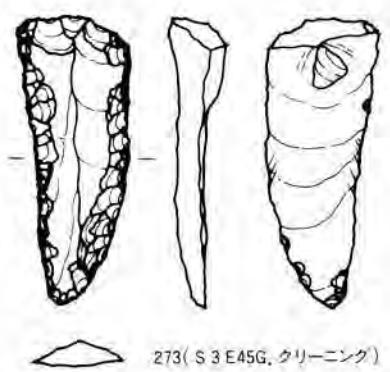
第20図 崎山貝塚出土遺物 (5)



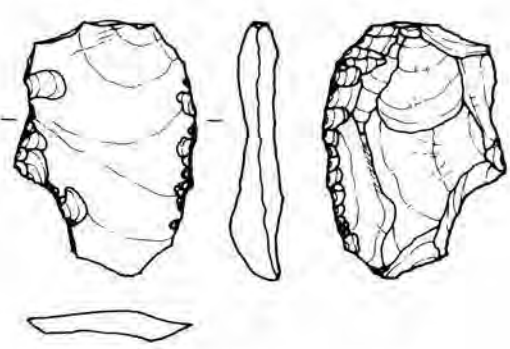
第21図 崎山貝塚出土遺物 (6)



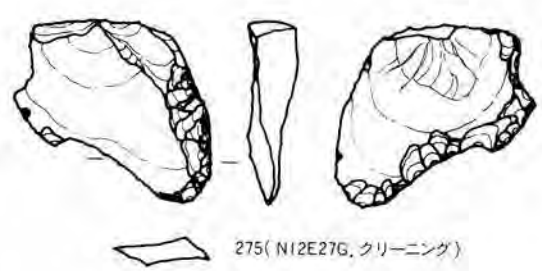
第22図 崎山貝塚出土遺物 (7)



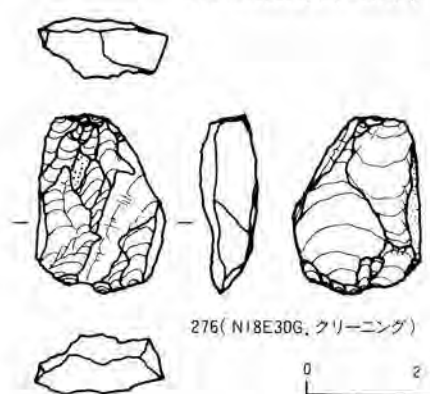
273(S 3 E45G, クリーニング)



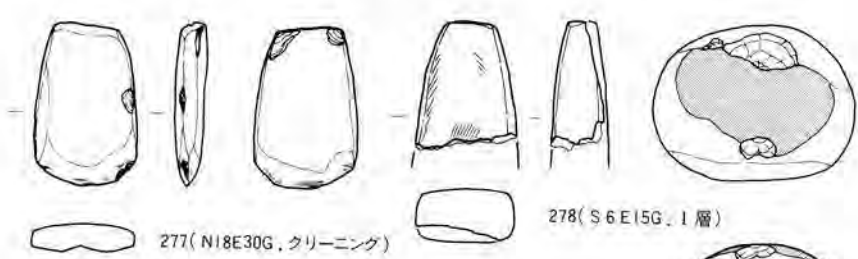
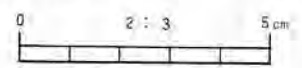
274(N12E21G, クリーニング)



275(N12E27G, クリーニング)

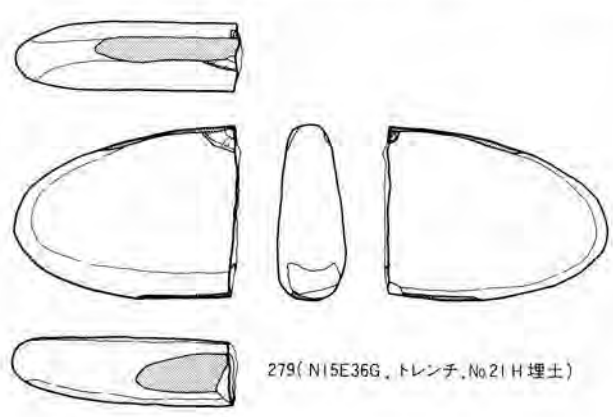


276(N18E30G, クリーニング)

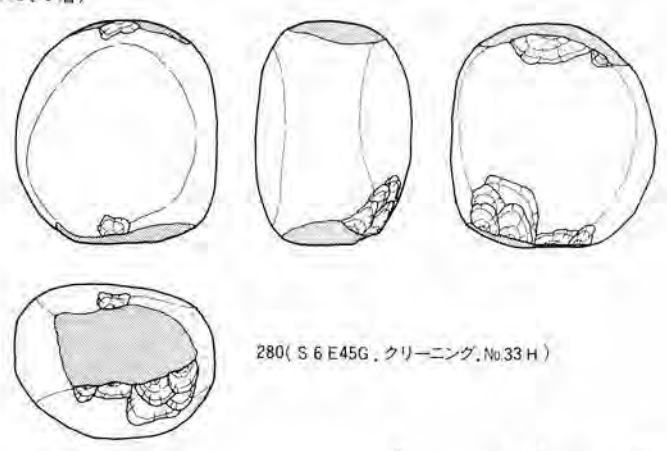


277(N18E30G, クリーニング)

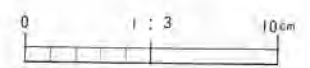
278(S 6 E15G, 1層)



279(N15E36G, トレンチ, No21H埋土)



280(S 6 E45G, クリーニング, No33H)



271は縦形石匙であるが、刃部形態は搔器的である。石材はチャート質泥岩を使用している。
270は基部に2つの小突起を有するもので、周縁を丁寧に調整している。主要な刃部は下辺
であると思われ、搔器的な機能が想定される。石材はチャート石泥岩を使用している。

273~275は削器でありいずれも打面を残している。273は縦長のブレード状剥片の両側縁に
片面からのみ調整を施すものである。両側縁には使用時の微細な剥離が認められる。274は不
定形剥片の1側縁に刃部を有するものである。275も不定形剥片を用いているが、打面以外の
周縁を調整する。一方の側縁部には欠入を有する。

石材は273・275がチャート質泥岩を、274が粘板岩を使用している。

276はピエス・エスキューイである。部分的に自然面を残しており、比較的小形の円礫を素
材とするようである。上下両端からの加撃による剥離が認められる。

石材はチャートを使用している。

272・277・278は磨製石斧であり、いずれも丁寧に整形されている。272は小形で、正面中央
部に縦位の沈線が施められ、これを剥離が切っている。背面は大きく剥落している。おそらく
擦切磨製によるもので、欠損後に再利用を企ったものと思われる。

277はやや薄手であるがほぼ完形品である。278は刃部付近を欠損するものである。

石材は272がやや細粒の安山岩質凝灰岩を、278はやや粗粒の安山岩質凝灰岩を、277が粘板岩
を使用している。

279・280は敲打磨石類である。279は偏平の楕円形礫の両側縁に機能磨面を有するもので折
損後に折損面の一部を擦って磨面を作出している。

280はやや肉厚の楕円形礫の上下両端に機能磨面を有している。

石材は279が安山岩質凝灰岩と、280が片麻岩を使用している。

石棒（第24図）

今回の発掘調査による出土遺物のうち最も特徴的な出土状況を呈している。

調査中に明らかに石棒であると判明したものについては第12図に平面位置を示しておいた。

石棒1（第12図版）はN6E18グリッドに立ったままの状態を検出されており、一部欠損し
てはいるが、敲打により整形されており明瞭な頸部を作出している。これについては、そのま
ま埋戻している。

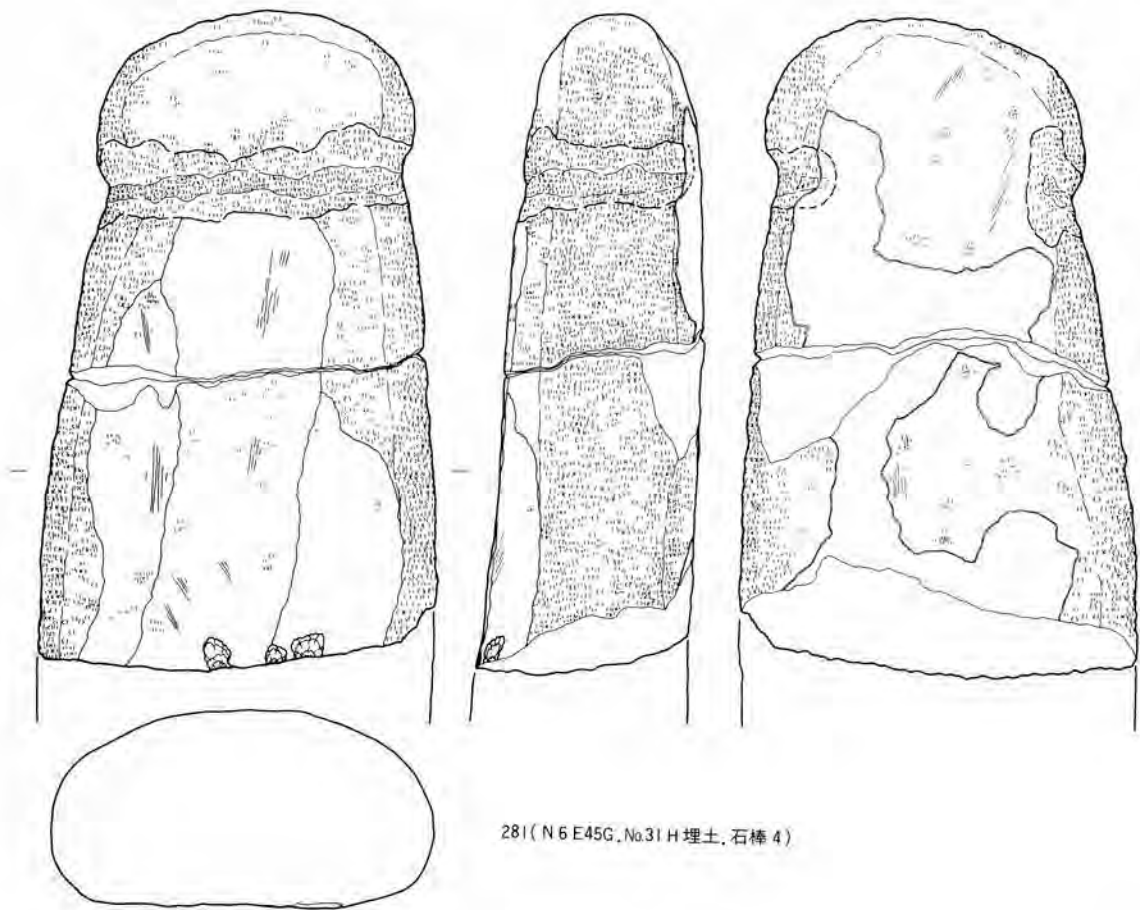
石棒2（第13図版）はN9E27グリッドに検出された土壌跡(?)の上面に配石状に置かれて
いたもので、敲打によって整形された頸部付近と、磨擦によって整形された体部の2片が出土
している。両者は接合しないが、いずれも二次的に焼成を受けている。

石棒3（第24図 281）はN15E36グリッドの第21号堅穴住居跡埋土最上層から出土している。

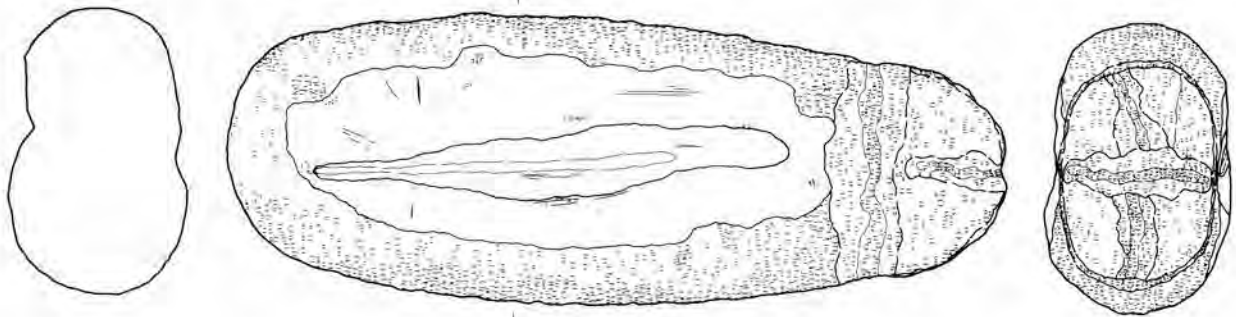
281は完形品で、敲打により頸部を作出し、頸部にはやはり敲打で十字形の溝を作出してい
る。体部は周縁が敲打で整形され、正面と背面には磨面を有し、ここに両面ともに縦位の溝が
作出される。形態的には他の石棒と異なるものである。石材は砂岩を使用している。

石棒4（第24図 280）はN6E45グリッドの第31号堅穴住居跡埋土最上層から出土している。

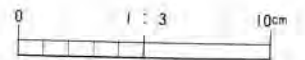
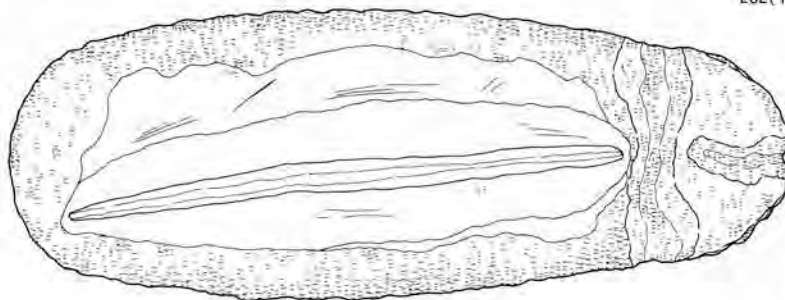
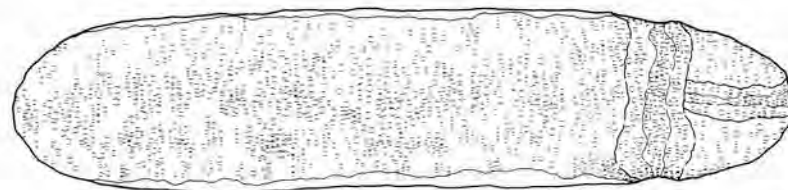
280は体部下半を欠くが、今回検出したもののうち最も大形である。敲打により頸部を作出
すが、頸部の溝は無い。体部は側縁部を敲打で、正面と背面は摩擦により整形する。石材は砂



281(N 6 E45G, No.31 H埋土, 石棒 4)



282(N 15 E36G, No.21 H埋土, 石棒 3)



岩を使用する。

このほかにもN6E30グリッドからは砂岩製の角のとれた四角柱形の礫で、表面に擦痕や敲打痕を伴うものが出土している。頸部を作出さない点から石棒というより立石などとして利用されたものと思われる。

また、これに以外にも検出時にわずかに顔を出しただけで、取り上げなかったものもあり、総数は更に増えるものと思われる。

(4) 低湿地

崎山貝塚の北・東・南の三方は低湿地にとり囲まれており、北側と南側から湧き出した小さな沢は東流し、崎山貝塚の東端部にてひとつの流れとなり、宿地区にて太平洋に注いでいる。

この低湿地は現在種に水田として活用されているが、地元の方によると開田されたのは比較的新しく終戦前後（昭和20年代前後）頃からだと言う。また、開田以前の地表面は現在よりだいぶ低いところにあり、沢水も清らかでウナギ等の魚がとれたとのことであった。

今回の調査は低湿地での遺構や泥炭層等の特殊な包含層の有無を探ることを目的とした。

当初、南北両側に調査区を設定する予定であったが、時間的且つ経済的理由により南側はボーリングによる調査のみに留めた。

北側の調査区は昨年度実施した北貝塚の調査区北端部より北方へおよそ30mのところへ3m×3mのグリッドを2地点設けて表土を剥いた後に、湧水量等からA地区のみを掘り下げた。

A区は地表から1.4m掘り下げた時点で凍結と安全性の問題から調査を打ち切り、これより下はボーリングによる調査を実施した。

(a) 基本層序

調査区内の堆積層はⅠ層～Ⅲ層に大別される。

Ⅰ層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。Ⅰa層は酸化により赤味がかったり、また、Ⅰc層はやや黒味を帯びている。いずれの層も柔らかく、しまりがない。

Ⅱ層も黒褐色土を基本土とするが、Ⅰ層よりも暗い。暗褐色土塊や黒色土塊を含む。Ⅰ層より下層へ次第に暗くなる。いずれの層も柔らかく、しまりがない。

Ⅲ層は黒色土を基本土とし、黒褐色土塊などを含み、上層から下層へ次第に暗くなる。いずれの層も柔らかく、しまりがない。

ボーリング調査によると、この下にⅢ層が更に20cm程堆積し、以下層厚30cm程の黒褐色土層、層厚30cmの暗褐色土層、褐色土層と漸移的に推移する。褐色土層については層厚を50cm確認した段階で大きな転石に当り、これ以上掘り下げられず、以下の堆積層については不明である。

結果として、今回の調査区内では縄文時代の泥炭層等は確認できなかった。

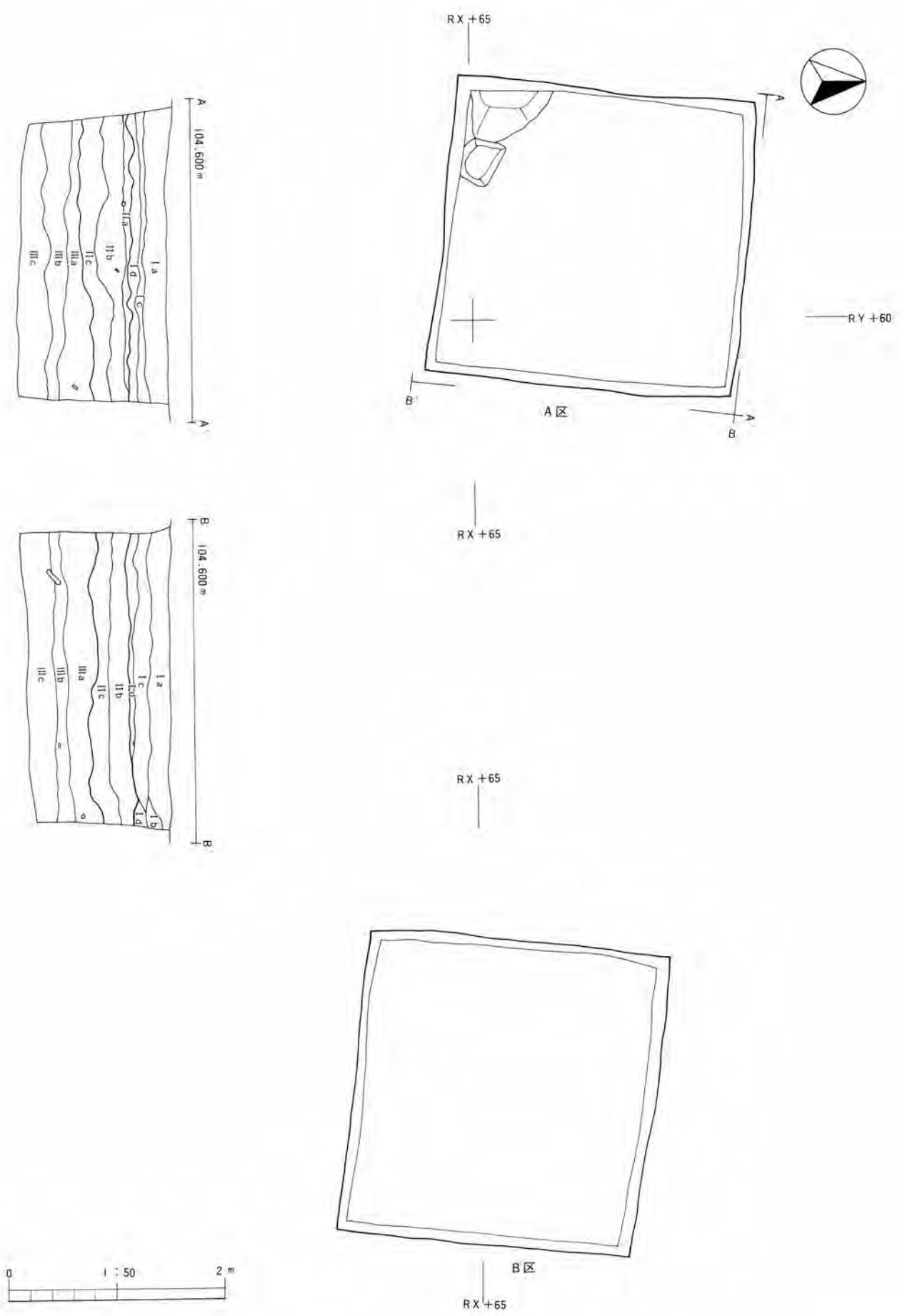
しかし、下層部の暗褐色土層～褐色土層は昨年度調査した北貝塚A-5区の5-Ⅳ層～5-V層に対応しているようで、縄文時代の堆積層である可能性は極めて大きいと言える。

(b) 出土遺物

出土遺物は極めて少なく、Ⅲ層から桶の底かと思われる円板状の板が、Ⅱ層下部～Ⅲ層上部から陶器片が、Ⅱ層からガラス片が出土しており、いずれも比較的新しい時期のものである。

これら以外には、各層から縄文土器片や石鏃などが少量出土している。

ボーリング調査にて掘り上げた土については、まだ水洗選別をしていないため不明であるが、やはり遺物の出土量は少ない様である。



第25図 崎山貝塚北側低湿地調査区

Ⅲ 調査のまとめ

早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査

今回の調査区は、第1次・第2次調査区の北側に位置し、一部重複する部分もある。これまでの調査成果を総合すると、本調査区西半部と第1次・第2次調査区のA区には一体の遺物包含層が形成されており、Ⅲ層～Ⅳ層は縄文中期後葉の大木8b式～大木9式期に伴うものと思われる。

しかし、これらに伴って縄文前期前葉の土器（およそ大木1式～大木2式）が多量に出土しており、遺物包含層が二次的に形成されたものである可能性を含んでいると言える。

また、集落構成については依然として不明であり、今後の調査成果の蓄積が望まれるところである。

崎山貝塚第9次調査

今年度で範囲確認調査が終了した訳であるが、一応ひとつおりの地点に調査区を設定し、遺跡のアウトラインもほぼ明瞭になって来た。

各地点毎の概要は既に【崎山遺跡群Ⅵ】等に記述したので、ここでは今年度の調査で明らかになった部分について補足することとしたい。

<東集落>

今年度の調査にて、環壕の東縁のプランがほぼ確定した。また、東集落西端部にいくつかのブロック毎に堅穴住居跡が重複することが確認された。一つは第20号～第22号堅穴住居跡であり、二つは第23号～第25号堅穴住居跡であり、三つは第26～第31号堅穴住居跡であり、四つは第32号～第33号堅穴住居跡である。あたかも堅穴住居跡を建てる場所が決まっていたかの如く、それぞれのブロック内では著しく重複してはいても、ブロック同志では重複していない。

また、今回の調査で掘立柱建物跡を確認できたことは大きな意義があるものと思われる。復元できたものは3棟のみであるが、柱穴の総数を見ると実数は相当なものとなりそうである。

最近、岩手県内でも縄文期の掘立柱建物跡は検出例が増えて来ているとは言え、やはり通常の集落跡に普遍的に見られるものでは無い様に思われる。

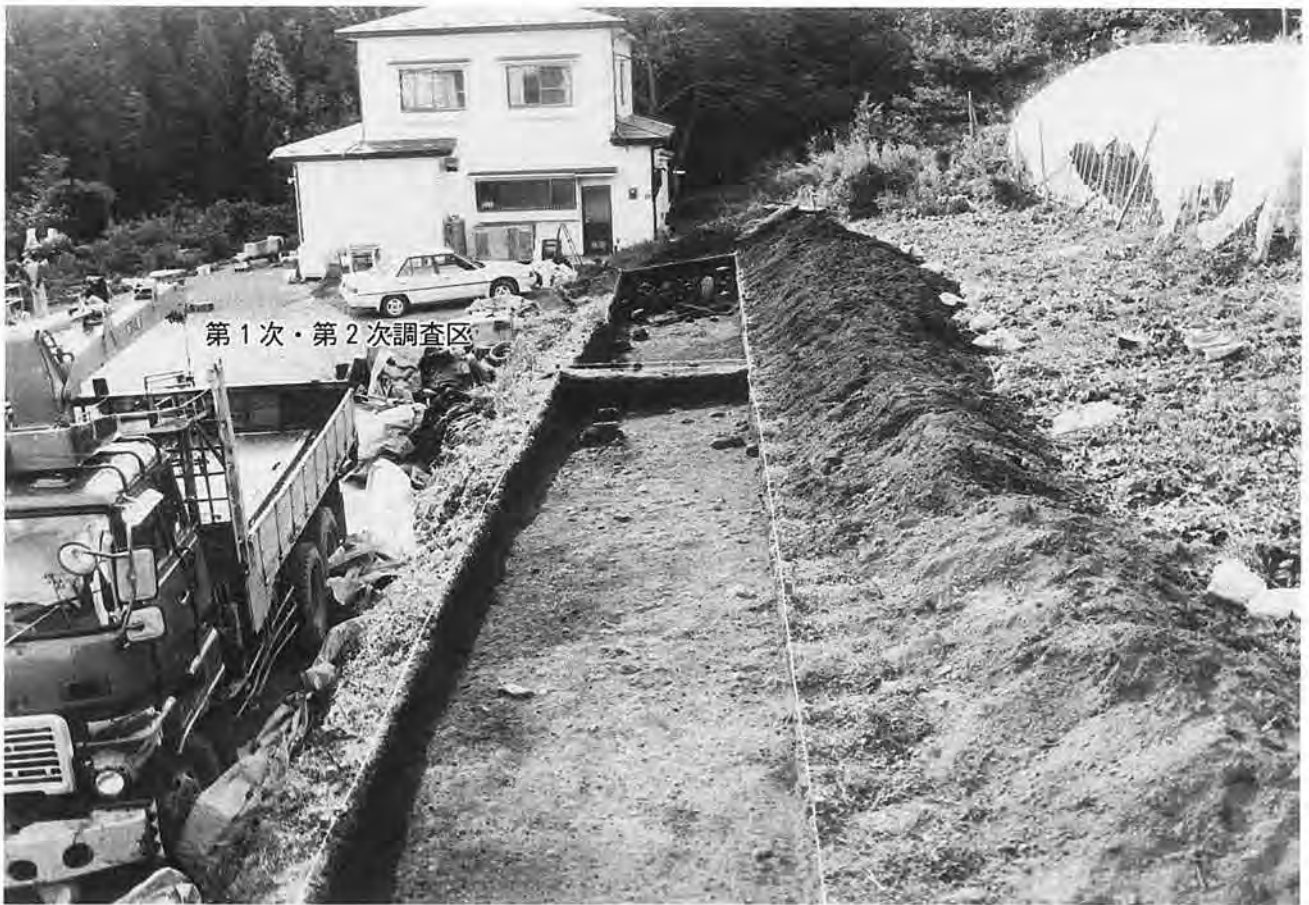
崎山貝塚の場合、掘立柱建物跡は東集落のしかも西端部にのみ集中し、西集落には（今のところ）認められない点の特筆される。この種の遺構が建てられる空間がかなり限定されていた可能性は指摘できるものと思われる。

しかも、この周辺からは石棒の出土頻度が極めて高いことも看過できないことであり、これらのことは、東集落西端部、場合によっては東集落全体の性格を特徴づけている可能性もあると言える。

<低湿地>

今回の調査では、縄文時代の堆積層と思われるものは確認したが、泥炭層等の特殊な包含層は検出できなかった。今後、調査地点や調査方法の検討を加えた上で再度調査を実施する必要があると思われる。

写 真 图 版



早稲栃Ⅱ遺跡第4次調査区全景



土層堆積状況

第2図版



土塚跡堆積状況



礫群検出状況



調査風景

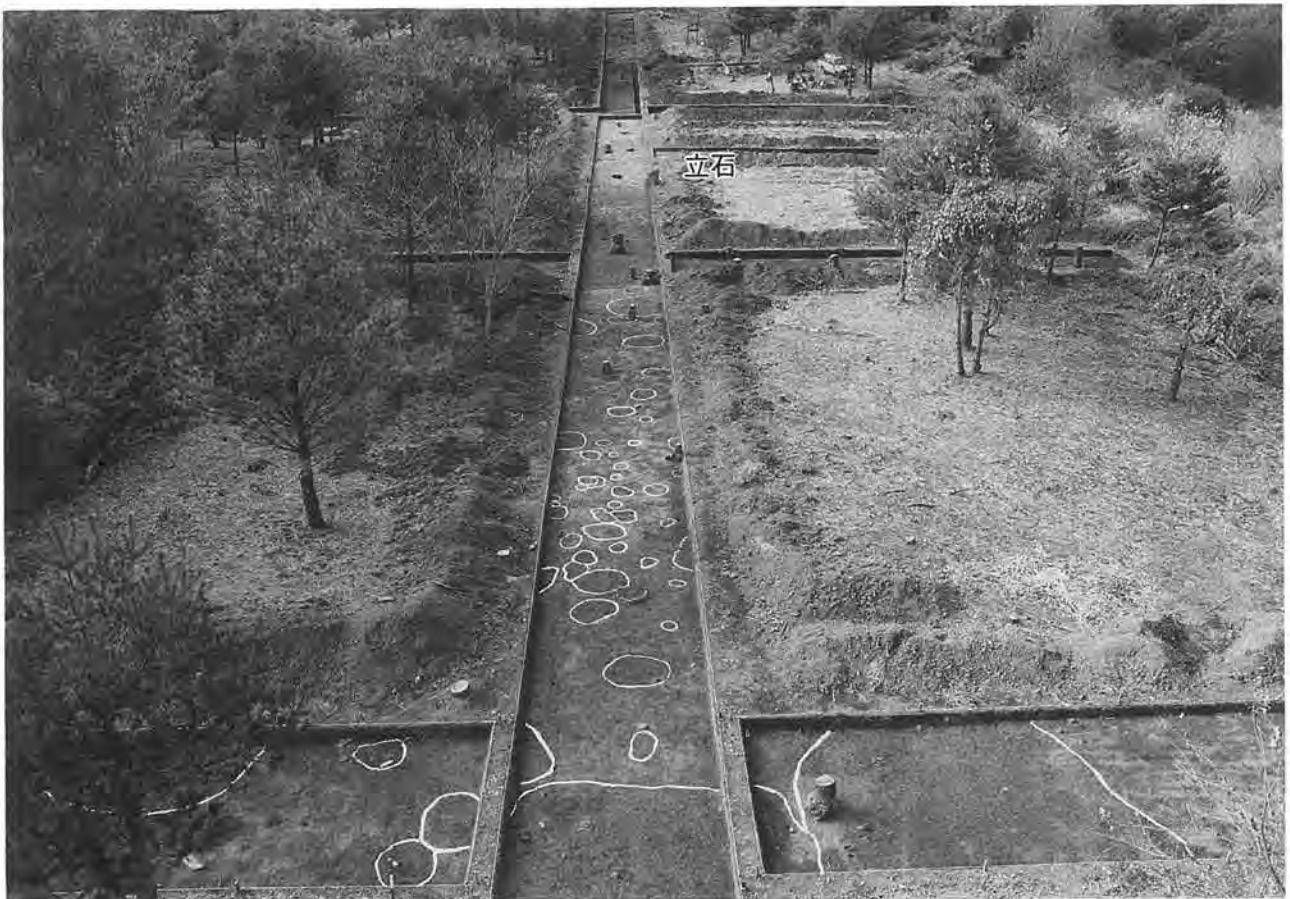


第IV層出土土器

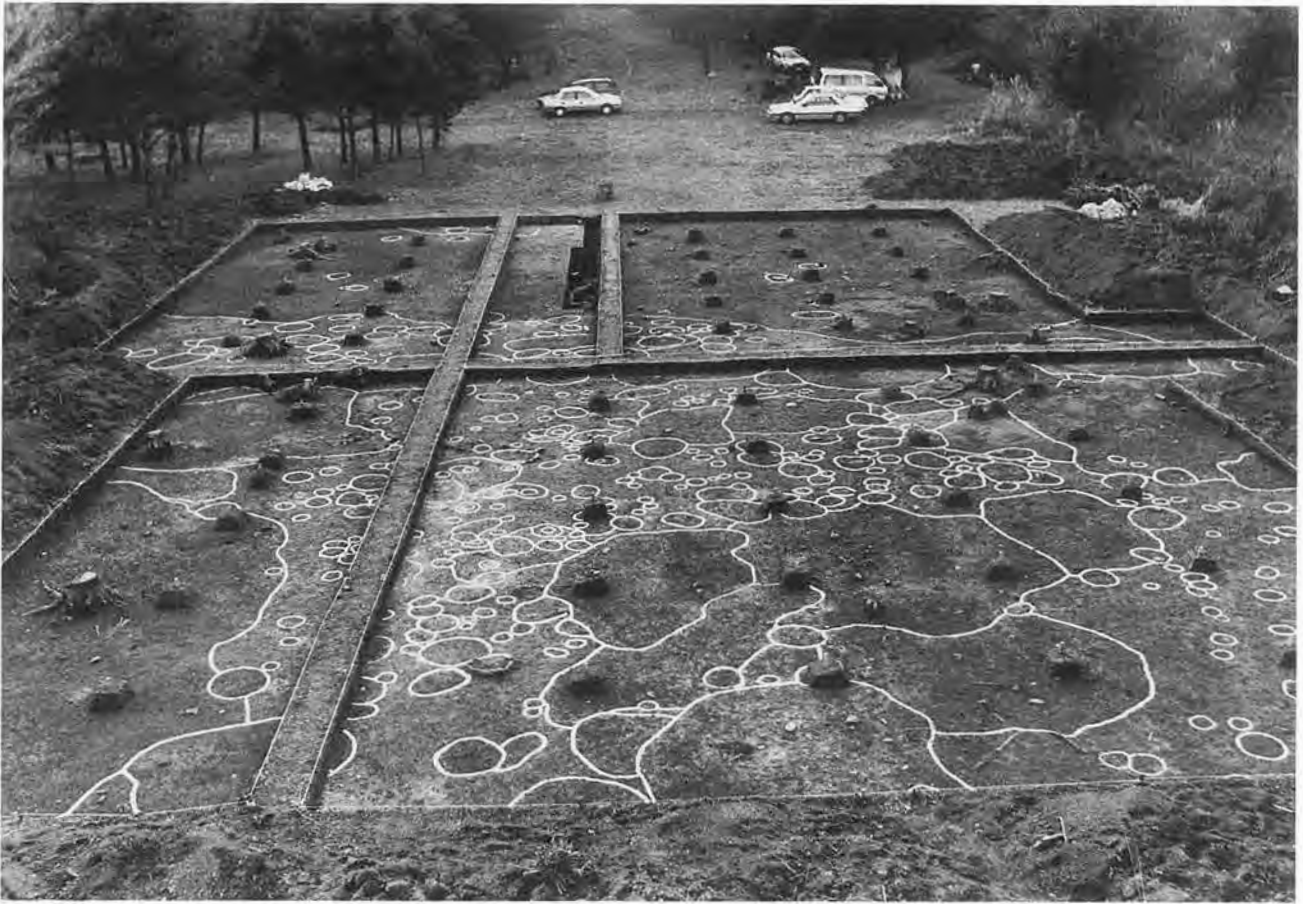
第4図版



崎山貝塚第9次調査区全景（調査終了時）



崎山貝塚第3次調査区全景（昭和63年度）



崎山貝塚第9次調査区全景（検出時）



同 上（石棒検出位置）

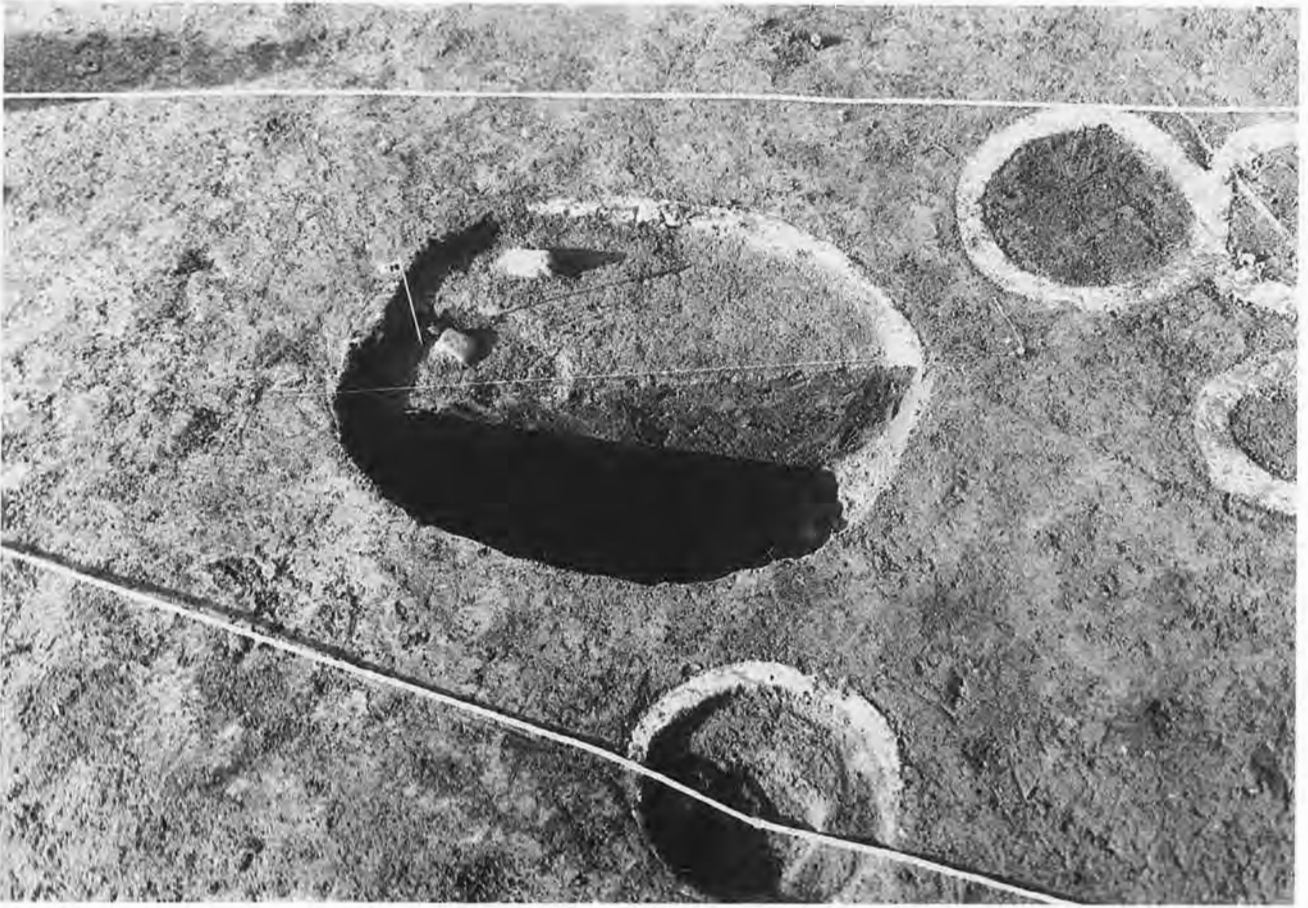
第 6 図版



崎山貝塚第 9 次調査区全景（検出時）



第 1 号掘立柱建物跡 P 33 堆積状況



第1号掘立柱建物跡P14堆積状況



第1号掘立柱建物跡P49・第2号掘立柱建物跡P17堆積状況

第 8 図版



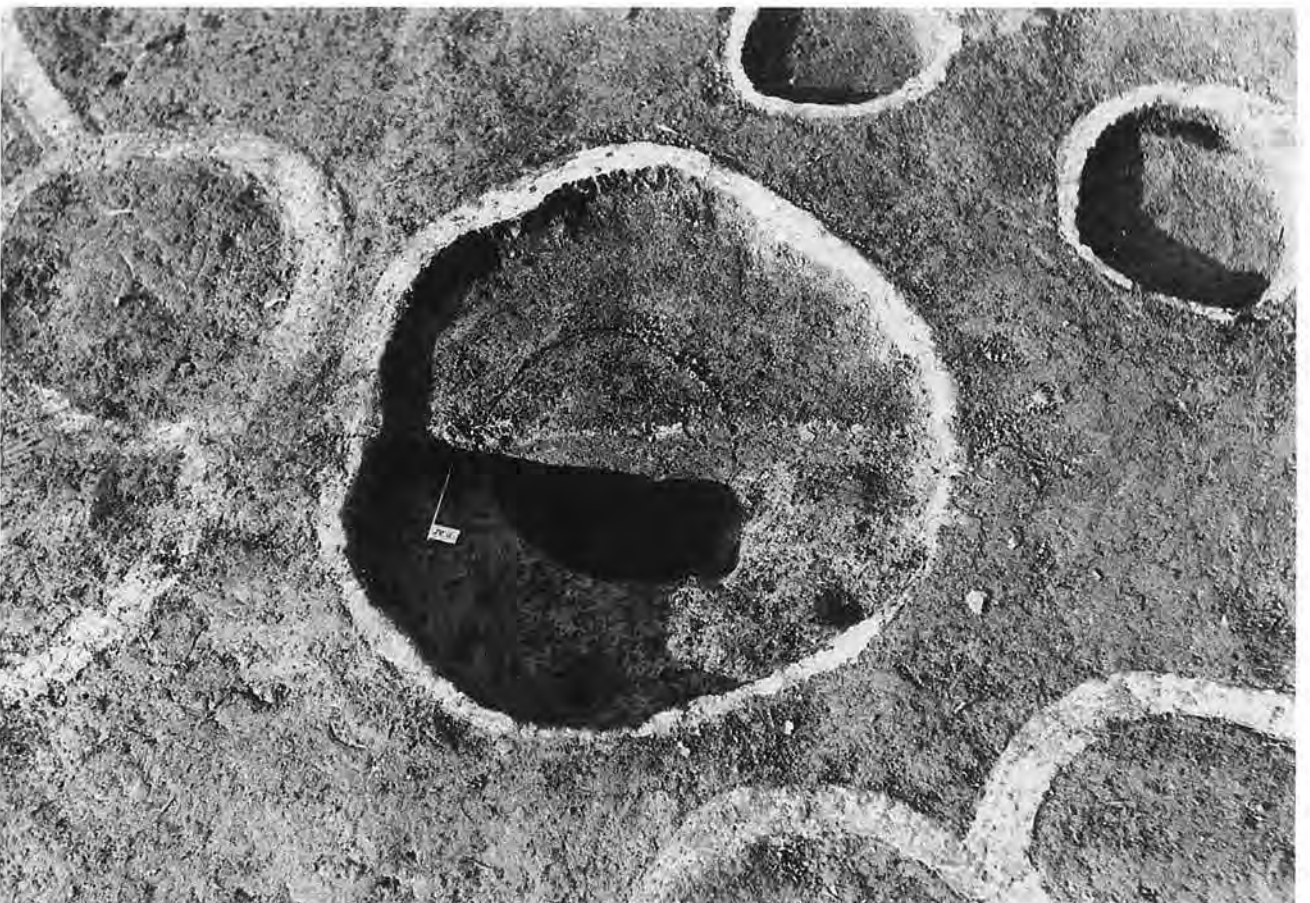
第 1 号掘立柱建物跡 P 53 堆積状況



P 26 堆積状況



P 63・P 53・P 58堆積状況



第4号柱列P 25堆積状況

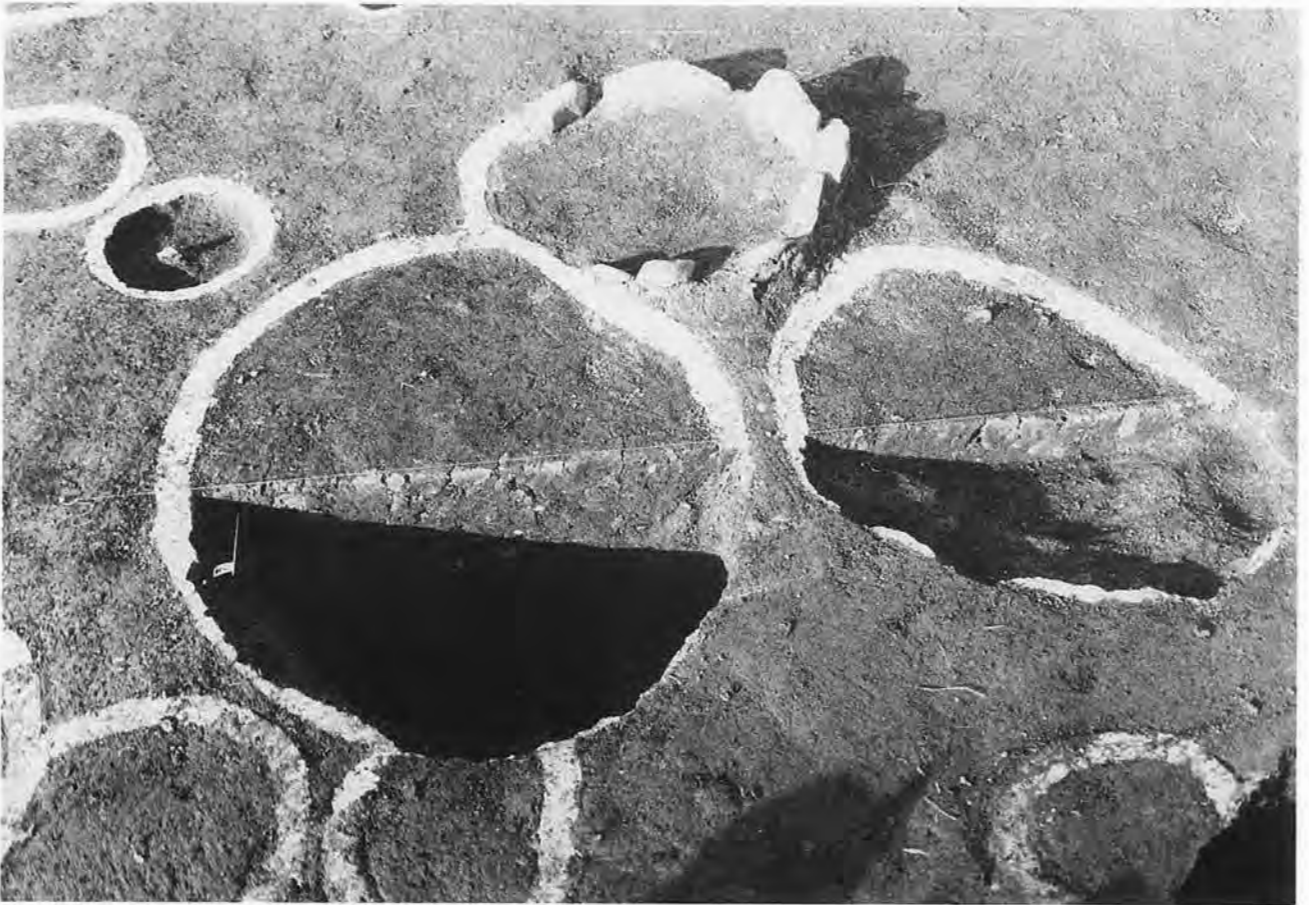
第10図版



P 55・P 56・P 57堆積状況



P 52・P 51堆積状況



P 24堆積状況



P 47・P 48堆積状況

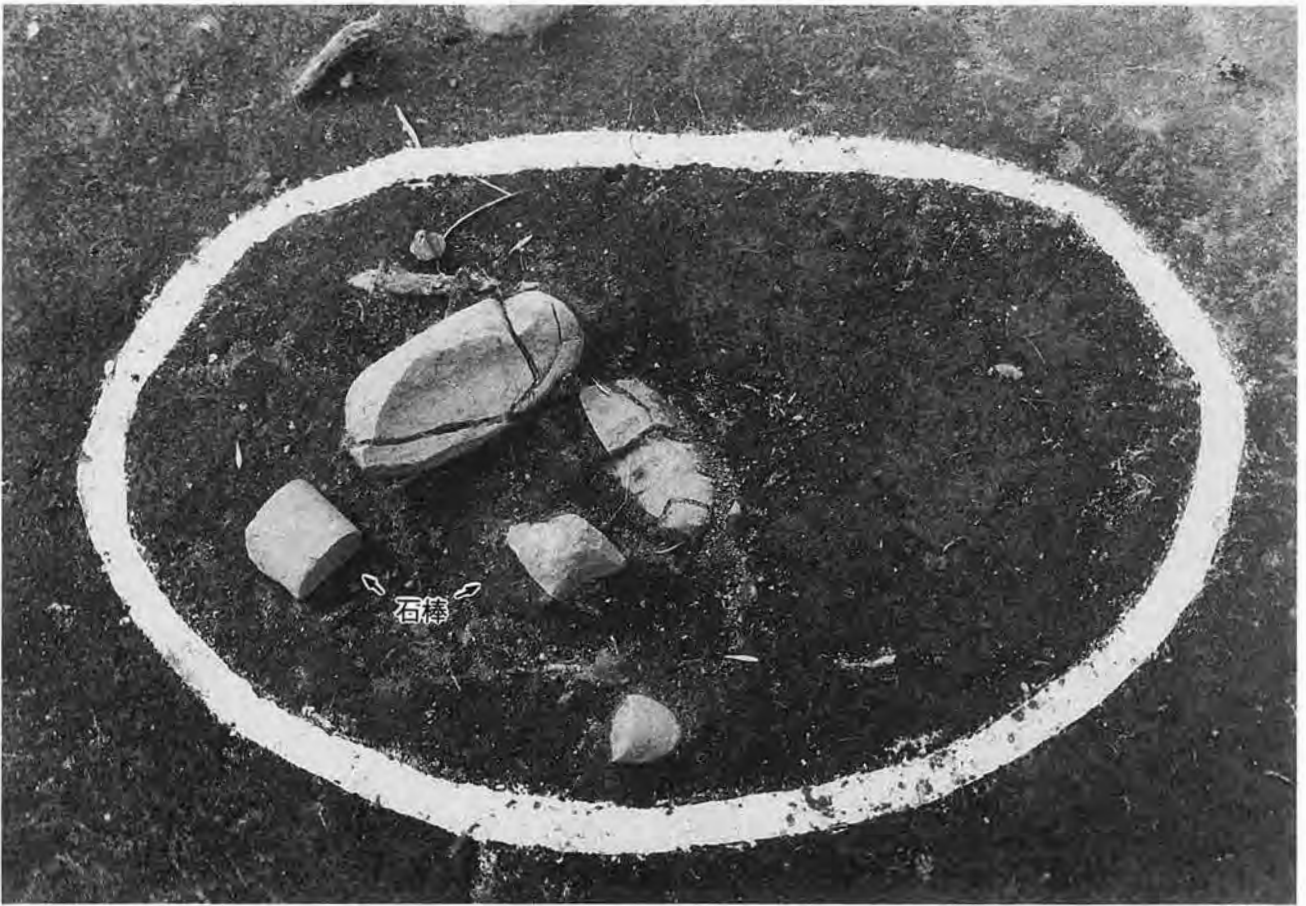
第12図版



石棒 1 検出状況



同 上



石棒 2 検出状況



石棒 3 検出状況

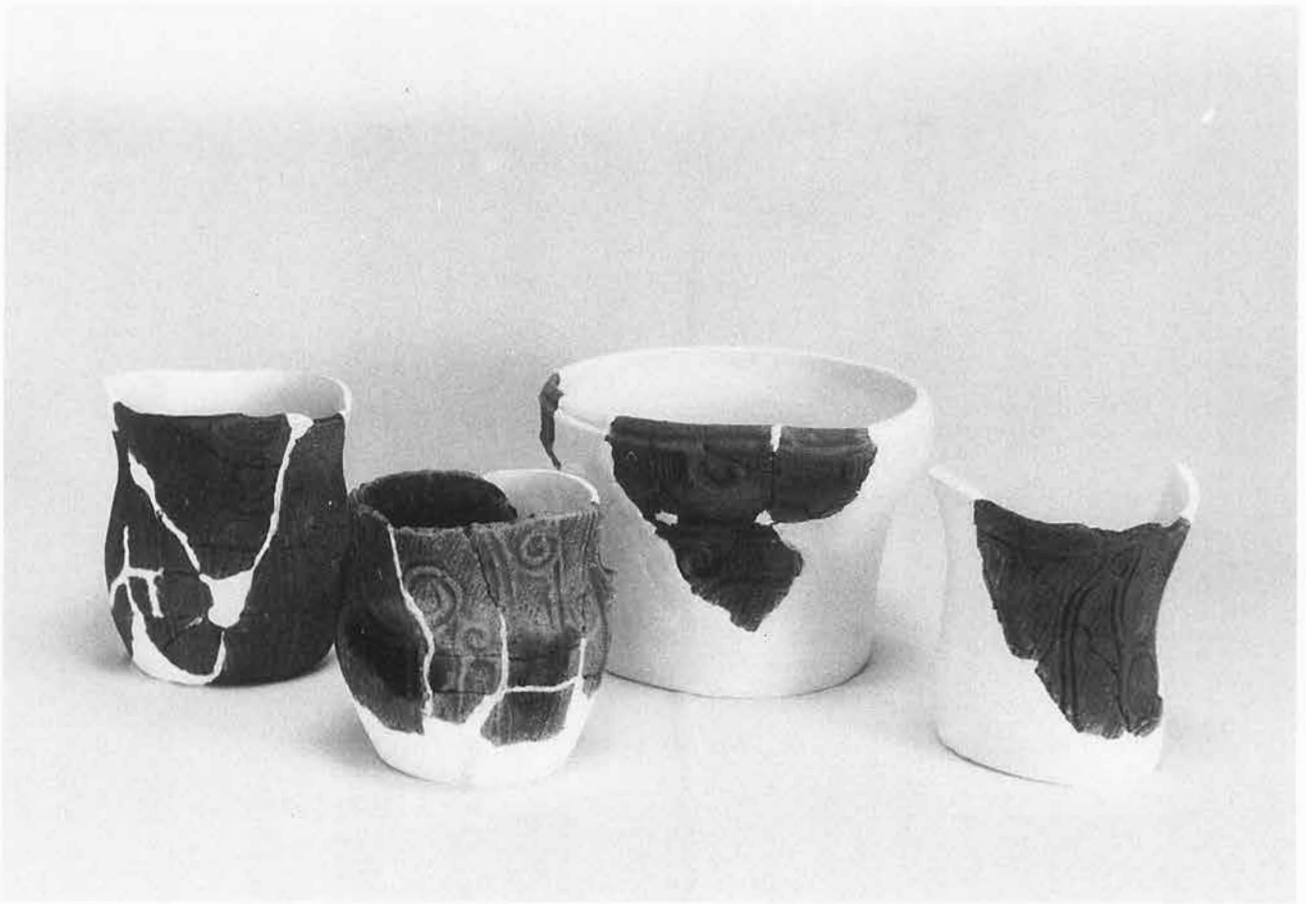
第14図版



石棒 4 検出状況



P 35遺物出土状況



P 35出土土器群



P 35出土土器 (1)

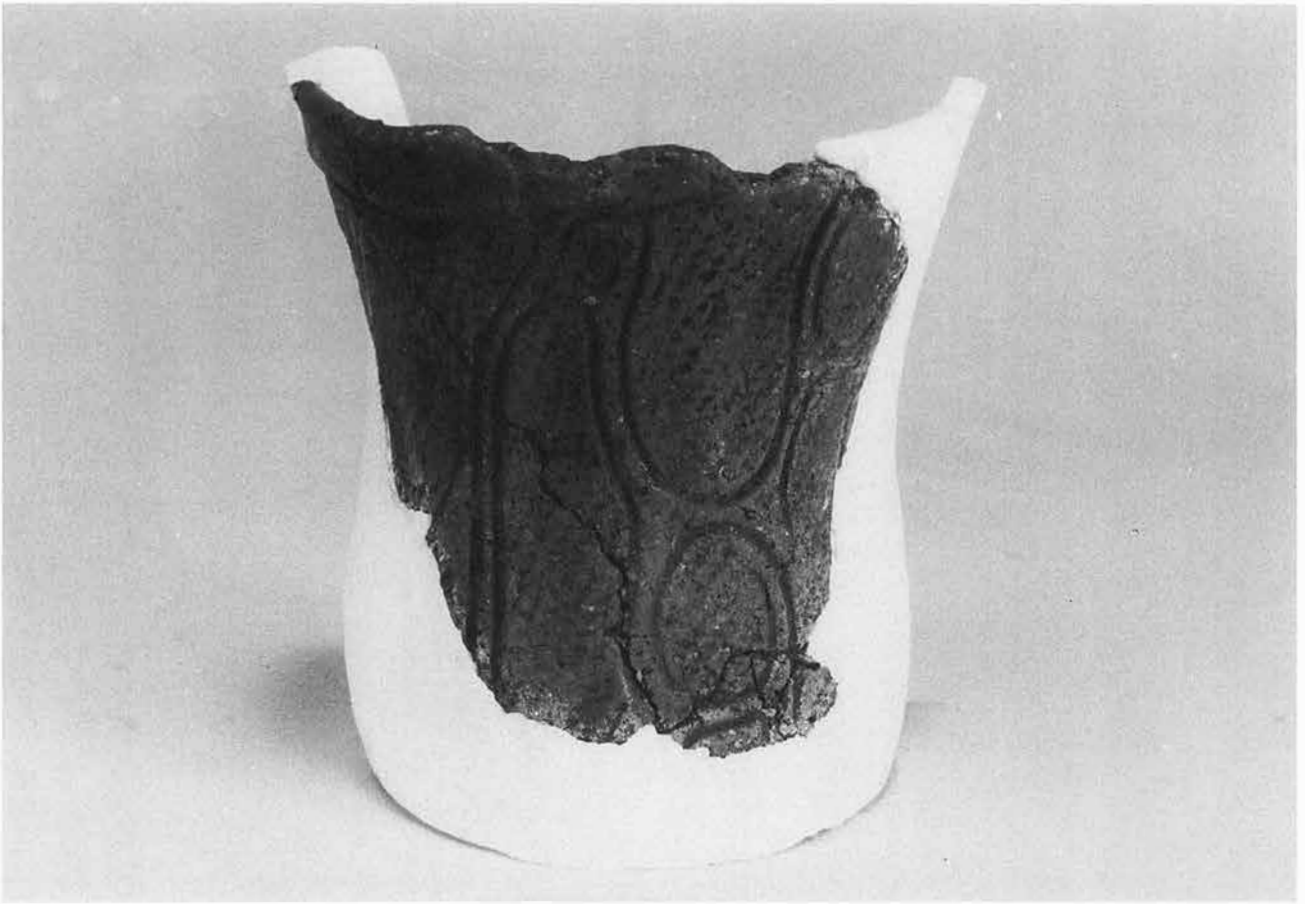
第16図版



P 35出土土器 (2)



P 35出土土器 (4)



P 35出土土器 (3)



第29号竖穴住居跡出土土器 (55)

第18図版



北側低湿地調査区（調査前）



同上（A区）

宮古市埋蔵文化財調査報告書41

崎山遺跡群Ⅷ

—平成5年度発掘調査概報—

1994.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2